

みる・かたる・つくる

千葉県立美術館年報

昭和52年度

CHIBA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



婦人像 浅井忠

目 次

あ い さ つ	1
沿 革	2
管 理 運 営	3
機 構	4
施 設	8
事 業 報 告	19
常 設 展	20
特 別 展	24
企 画 展	29
団 体 展	37
教育普及	42
昭和52年度事業一覧	50
利 用 状 況	52
日 誌 抄	53
関 係 令 規	54

ごあいさつ

千葉県立美術館が開館して、第4年度の成果を報告する時期を迎えました。

いつも変わらぬご理解、ご支援をいただいている関係者をはじめ、広く利用者の皆様様に、心からお礼を申し上げます。

お陰をもって、本館の存在も、東山魁夷展等を契機として、漸く県民の皆様の中に定着しつつあります。しかしながら、資料の収集・調査研究・展示・教育普及事業などの、諸活動が、相互に関連をもちながら、バランスよく進められたかどうか、また、県民の皆様の期待に応え得る密度の高い、充実したものであったかどうか疑問が残るところではありますが、今後さらに反省を加え改善充実を図る考えです。

本年度事業における特色的なものを挙げれば、①「東山魁夷展」「海と湖沼展」の特別展をはじめ、企画展、常設展の充実を図り、利用者の方々に親しまれる魅力ある展覧会を試みたこと。②現状の施設の中で美術普及室を開設し、生活に直結する美術館のあり方を求めたこと。③美術館夏季大学の開講、「美術を語る会」等により“かたる”活動の充実を図ったこと。④東山魁夷展で週一日午後7時まで開館時間延長ならびに小・中・高の学校団体割引制度等により、利用者の便宜を図ったこと。⑤駐車場の拡張と各方面よりのご協力により前庭を中心とした植栽等による環境整備等です。

なお、平日は美術館行の直通バスが運行されていないという状況の中で、本年度末には開館以来の来館者数が40万人を数える程に迫ったことは喜びにたえません。

いよいよ昭和53年度は、待望の美術普及棟の実施設計の段階に入り、本格的な活動をめざしての運営も考えねばならないと思っています。

こんごとも諸先輩のご指導と県民の皆様のご鞭撻・ご協力をお願いする次第です。

昭和53年6月

千葉県立美術館長
市 原 正 夫

沿革

概要

千葉県立美術館は、昭和43年にまとめられた県立博物館設置構想に基き、建設計画をすすめ、昭和48年4月教育庁文化課に美術館準備班を置き、開館事務にあたった。同49年3月第1期工事の展示棟が完成し、4月1日千葉県立美術館として機関設置し、10月23日開館式を挙げ、一般公開を始めた。同51年2月第2期工事の管理棟が完成した。

なお、千葉県の第5次総合5ヶ年計画により、第3期工事として、美術普及棟の建設が予定されている。

昭和44年12月9日 第1回千葉県立美術館建設懇談会が開かれる(委員15名)
昭和45年1月19日 県立美術館建設の請願書が2月県議会で採択される
昭和45年7月24日 建設地として千葉公園に内定する
昭和45年11月12日 第1回美術館設置準備専門委員会が開かれる(委員10名)
昭和46年3月31日 千葉公園敷地の美術館基本構想成る
昭和46年6月24日 体育館移転問題等で千葉公園内建設が不可能となる
代案として千葉中央港埋立地が提示される
昭和47年1月5日 建設地を千葉中央港の埋立地に決定し、使用について開発庁長と教育長で覚書を交換する
昭和47年3月31日 基本設計完了する 株式会社大高建築設計事務所
昭和47年7月31日 展示棟 第1期工事 の実施設計完了する

昭和47年10月13日 展示棟建築工事請負契約議案可決される
昭和47年12月10日 展示棟建築工事着工 管理・大高建築設計事務所、施工・竹中工務店
昭和48年4月1日 文化課に美術館準備班を置き、開館事務にあたる
昭和48年11月30日 管理棟 第2期工事 の実施設計完了する
昭和49年3月31日 展示棟建築工事竣工
昭和49年4月1日 千葉県立美術館発足する職員14名
昭和49年10月23日 開館記念式典を行なう
昭和49年10月24日 開館記念展「千葉県美術展覧会」を開催 一般公開を始める
昭和50年3月13日 管理棟建築工事請負契約議案可決される
昭和50年3月15日 管理棟建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)
昭和51年2月15日 管理棟建築工事竣工
昭和51年3月2日 管理棟完成記念特別展「浅井忠とその師弟展」を開催する
昭和51年6月7日 寄付によって、正面玄関に植栽を行なう
昭和52年4月10日 展示棟の一室に美術普及室を開設する
昭和52年1月18日 外構工事として、駐車場が拡張され、101台の収容となる
昭和52年3月12日 彫刻の屋外展示をはじめる
昭和53年2月21日 美術普及棟の準備会が発足する

管 理 運 営

昭和49年4月機関設置以来、4ヶ年余を経て、本館の存在とその運営も漸く軌道にのり「みる・かたる・つくる」の各種事業も現状の施設設備の中で、利用者の期待に応えべく、その具体化を図ってきた。

入館者数は、開館以来昭和52年末現在で、396,696人を数え毎年上昇の傾向を示し、特に「東山魁夷展」は、24日間で最高の41,230名に達し、本館企画の展覧会・団体展を通じて最高の入館者数となった。

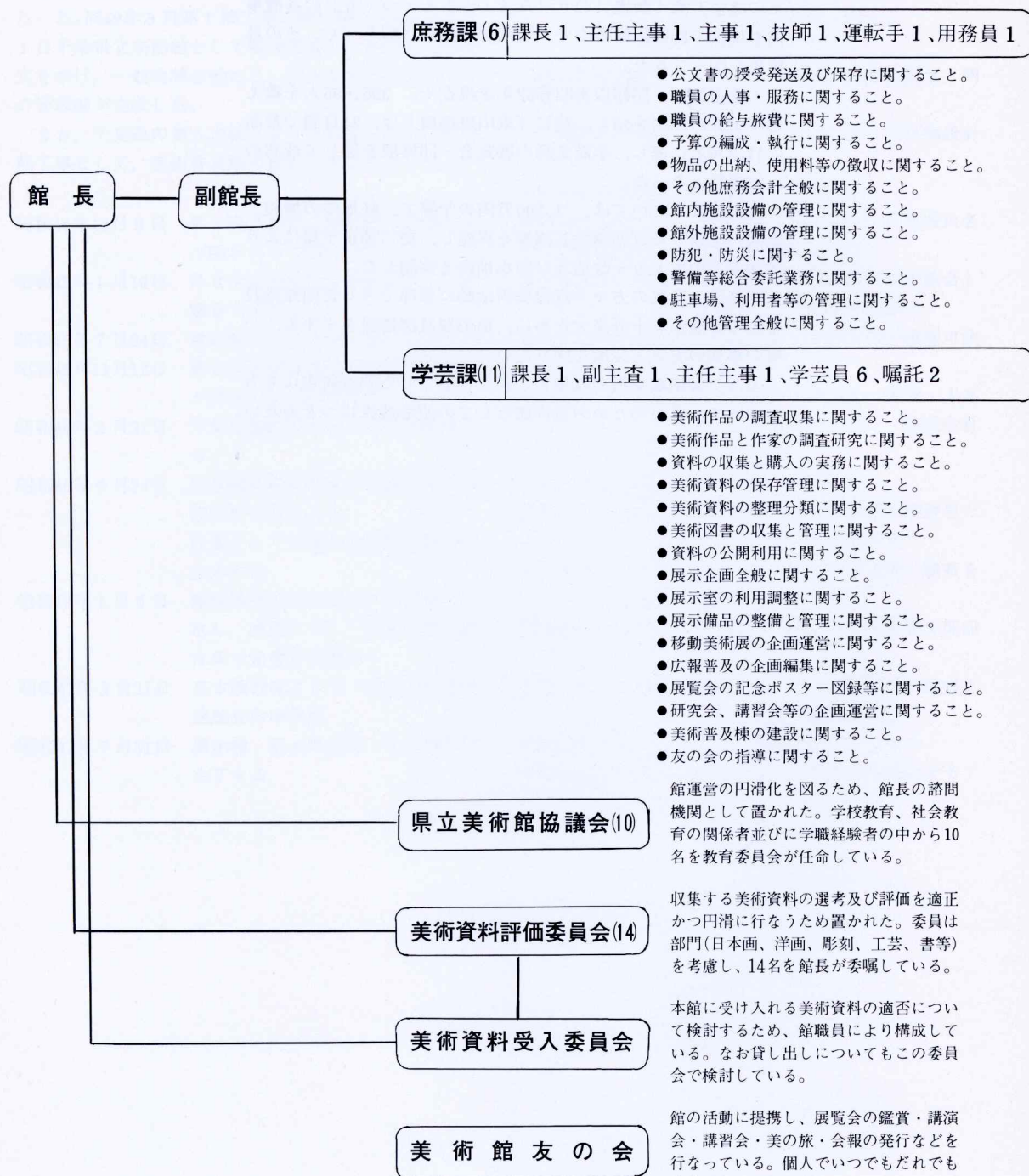
施設整備においては、1,500万円の予算で、駐車場の増設、庭園の芝張り及び囲障の石積等を実施し、更に補正予算により1,480万円でサッシ改造及び防水補修を実施した。

今後は、県民の方々が直接美術活動に参加できる美術館施設としての使命を十分果たすために、美術普及棟建設をすすめ、一層の事業の充実・発展を図りたい。

また、美術館資料の収集とこれを背景にした調査研究にも力を入れて、県民のための美術館としての使命達成につとめたい。

機 構

組織および事務分掌 (53.3.31現在)



職 員

館 長 市 原 正 夫
副 館 長 高 橋 在 久

庶務課

課 長 坂 本 雅 生
主任主事 高 橋 勝 利
主 事 菅 井 富美子
技 師 矢 部 喜 信
運 転 手 篠 原 恒 雄
用 務 員 長 島 則 子

学芸課

課 長 大 木 衛
副 主 査 佐 藤 信 夫
主任主事 宮 内 忠 昭
学 芸 員 中 村 哲 子
小 野 禮 子
米 田 耕 司
大久保 守 司
藤 川 正 司
前 川 公 秀
非常勤嘱託 石 井 秀 雄
渡 辺 真 彌

協議会委員

氏 名	役 職	氏 名	役 職
◎浅見喜舟	和 洋 女 子 大 学 教 授	○鈴木民三	千葉市教育委員会教育長委員
相川 勝衛	千 葉 県 高 等 学 校 長 協 会 副 会 長 県立木更津高等学校長	鈴木 秀一	千 葉 市 教 育 委 員 会 社 会 教 育 部 長
遠藤 健郎	画 家	野口 貞子	千 葉 市 婦 人 グ ル ー プ 連 絡 会 長
郡司 幹雄	県文化財保護審議会 副 会 長	牧田 茂	日 本 民 俗 学 会 理 事
笹岡 了一	千 葉 県 美 術 会 理 事 長	八代 進	千 葉 県 小 学 校 長 副 会 長 千 葉 市 立 新 宿 小 学 校 長

◎議長 ○副議長

資料評価委員

氏 名	役 職	部 門	氏 名	役 職	部 門
植村鷹千代	美 術 評 論 家	洋 画	中村伝三郎	東京国立文化財研究所 美術部 第二研究室長	彫 刻
金子 量重	大妻女子大学講師	工 芸	久富 貢	跡見学園女子大学教授	日 本 画
嘉門 安雄	ブリジストン美術館館長	洋 画	細野 正信	東京国立博物館学芸部 美術課 主任研究員	日 本 画
限元謙次郎	美 術 評 論 家	洋 画	堀江 知彦	二松学舎大学教授	書
桑原 住雄	筑波大学教授	彫 刻	本間 正義	国立国際美術館館長	彫 刻
弦田平八郎	神奈川県立近代美術館 学 芸 課 長	日 本 画	前田 泰次	東芸京術大学教授	工 芸
友部 直	共立女子大学教授	工 芸	松下 英麿	美 術 評 論 家	書

昭和52年度予算概要

(単位 千円)

事 業 名	予 算 額	事 業 概 要
運営費(人件費除く)	86,271	館の維持・管理・運営
広 報 普 及 費	2,320	館報発行・講習会等
特 別 展 費	11,597	特別展2事業
平 常 展 費	5,403	企画展常設展5事業
設 備 整 備 費	33,000	資料・図書・展示備品
建 設 費	15,000	外構整備
計	153,591	

※上記以外14,800千円の工事費本庁予算

収蔵資料 (昭和53年3月31日現在)

(ア) 収蔵別内訳

	保 管 換	購 入	寄 贈	合 計
日 本 画	23	21	31	75
洋 画 画	35	69	106	210
書	14	13	5	32
工 芸	9	25	12	46
彫 塑	10	13	1	24
版 画	3	50	33	86
合 計	94	191	188	473
研 究 資 料	73	86	191	350
教 育 資 料	116	0	238	354

(イ) 年度別内訳

	昭 和 49 年 度	昭 和 50 年 度	昭 和 51 年 度	昭 和 52 年 度
日 本 画	28	33 (+ 5)	69 (+36)	75 (+ 6)
洋 画	57	108 (+51)	193 (+85)	210 (+17)
書	16	24 (+ 8)	31 (+ 7)	32 (+ 1)
工 芸	17	21 (+ 4)	39 (+18)	46 (+ 7)
彫 塑	13	17 (+ 4)	19 (+ 2)	24 (+ 5)
版 画	3	20 (+17)	27 (+ 7)	86 (+59)
合 計	134	223 (+89)	378 (+155)	473 (+95)
研 究 資 料	138	148 (+10)	234 (+ 86)	350 (+116)
教 育 資 料	118	118 (+ 0)	354 (+236)	354 (+ 0)

()内は当年度の収蔵点数

施 設

この建物は、幾つかの建設候補地の中から、千葉港に隣接した臨海埋立地の一角に計画された。計画着手当時はこの付近は訪れる人もなく、荒れ果てた海を通して石油基地のタンク群や工場と煙を吐き出す煙突が望める環境であった。

このような当初の環境下で、空気汚染、降下媒塵そして塩害など、建物に与える悪影響が予測されるために、材料の選択、構法、空調計画等は十分な検討がなされた。以下、主な部分について記す。

外壁の打込みタイル—先積ブリック構法

従来の外壁をコンクリートで表現している建物とは異なり、炉器質タイルを型枠代にしてコンクリートと一体に打ち込む構法をもちいた。

今回使用したタイルは従来の断面と異なり、コの字型の断面をしており、型枠にセットせずモルタルにて積上げられるように見込み寸法を5cmの厚味にしてある。

施工方法は、内型枠、配筋工程の次のタイルを積み5段毎に型枠のホームタイを通して、2,400mm程度まで積み上げ単管にて固定する。この2,400mmの高さは、設計段階での試作実験にて安全を確認した数値である。試作段階での支保工は、縦方向に角材を400ピッチに通し、横方向に単管を480ピッチに通し固定したが、施工時は、縦方向に単管を480ピッチに通して固定した。コンクリートの打設は、1.5m～2.0m/hの速度を目標に行ない、ポンプにて打設可能な程度までスランブを下げた。この工程を繰返しタイル壁面を構成してゆく。

タイル面の施工時の汚れ防止には、ふのりを塗布した。タイルの目地は積み上げる工程で仕上げられ、表面に現われない目地の空隙にコンクリートのノロがしみ込んでゆき、目地からの透過水を防ぎ満足する状態に仕上がった。

屋根の天然スレート

前述のような環境のもとで、勾配屋根に適し、十分にもちこたえられる材料としては耐候性鋼等が考えられたが畦により天然スレートを使用した。

空 調 計 画

計画当初より、良好とはいえない外部環境から美術品をいかに保護するかが、海浜に建つ美術館として、ひとつの重要なテーマだった。外気取入れは、内部に自動巻取りフィルター、ユニット型フィルター、活性炭フィルター、キャビラリーワッシャーの4種類の空

気清浄フィルターを組込んだ外気処理器を通して供給されている。

展示棟はCAV（定風量型）+VAV（可変風量型）方式により計画されている。わが国の美術館は、平常の館内利用者に対して特別展や団体展等のときに非常に利用者がふえて、発熱負荷の変動が大きくなる。VAV方式は、こういった条件に対して非常に効果的であるといえる。

管理棟は、エネルギーの省力化にも役立つVAV方式を採用し、収蔵庫は、露点再熱制御方式により二つの条件の異なる収蔵庫を2台の空調機で空調されている。

照明計画

展示壁面は、自然光源と人工光源とにより全体計画されている。

自然光源は展示室の高窓から取り入れられ、外部の溝型ガラスと内部の紫外線吸収のアクリル拡散板を経て壁面に達する。しかし、太陽直射光の鉛直面照度は8時から15時の間で10%の時間が80,000lx以上、30%の時間が50,000lx以上、50%の時間が25,000lx（平均）以上、90%の時間が5,000lx以上という測定値がありまた水平面照度にしても50,000lx（薄晴）から5,000lx（曇天）の範囲と非常に明るい。このように必要以上に明るい光源は、調光通路内に設けられた2枚の電動スクリーン（これは、計算値により鉛直面照度60,000lx以上の条件のとき必要な枚数で、それぞれ異なった透過率を有する布を使用した）にて基準の壁面照度になるよう調光される。

計算値による透過率をもつクロスでの何回かの現場実験の結果、クロスは白地のポリエステル（透過率53.6%）と黒地のジョーゼット（透過率35%）の2枚を採用した。ここで留意すべき点は、クロスの遮光性能を良くするために、厚地の布や、コーティングされた布を使用すると壁面に色がつくことである。壁面の照度分布の状態は、視覚的に均一な壁面が確保できた。

曇天・雨天に対しては、蛍光灯と白熱灯を補助照明として設置した。蛍光灯と白熱灯を併用したのは、演色性を高めるためである。

第1、2展示室は、すべて蛍光灯と白熱灯による人工光源で計画されている。壁面照度は、最高200lxに押えてある。

固定ケースは基準照度を180lxに設定した。照明方法は、全面アルミルーバーの天井ふところに蛍光灯を2本並列させ、その間に白熱灯2個を配置した。

計 画 デ ー タ

【設計監理者】

建築：大高建築設計事務所
構造：木村俊彦構造設計事務所
設備：科学応用冷暖研究所
備品：大高建築設計事務所

【施工者】

建築：(株)竹中工務店
設備：空調＝東洋熱工業(株)，衛生＝第一管工事(株)，
電気＝関東電気工事(株)
備品：天童木工，山口木材，佐々木ブラインド

【設計期間】

基本設計：1971年11月～1972年1月
実施設計：1期展示棟＝1972年7月～1973年1月
2期管理棟＝1973年7月～1973年11月

【施工期間】

1期展示棟：1973年4月～1974年3月
2期管理棟：1975年4月～1976年2月

【階 数】

地下1階，地上2階，塔屋1階建

【高 さ】

基礎底まで：GL－5.00m，最高軒高：展示棟＝
GL＋4.88m，管理棟＝GL＋9.33，最
高高さ：GL＋15.20m

【都市計画地域指定】

用途地域：準工業地域

【規模・面積】

敷地面積：33,057.87㎡，建築面積：6,191.85㎡，建
ぺい率：18.73%，延床面積：7,469.79㎡，展示棟＝
5,194.59㎡，管理棟＝2,275.20㎡，施工延面積：7,
469.79㎡，駐車台数：101台

【構 造】

主体構造：鉄筋コンクリート造（プレストレスト導
入），屋根：鉄骨造／主鋼材の種類：H型，山型，平
鋼＝SS41および高張力鋼，PC鋼棒／コンクリ
ートの種類：A種・普通コンクリート（基礎・地中梁
・1階スラブ） $F_c=210\text{kg}/\text{cm}^2$ ，B種・軽量コンク
リート（梁・スラブ用・地上部） $F_c=300\text{kg}/\text{cm}^2$ ，C種
・軽量コンクリート（地上部躯体でA，B以外の柱
・壁など） $F_c=240\text{kg}/\text{cm}^2$

【外部仕上げ】

屋根：勾配屋根＝アスファルトルーフィング・コロ
シート，天然スレート3枚葺，陸屋根＝アスファ
ルト防水，押えコンクリート，豆砂利打込み
外壁：珪酸質タイル（先積ブリック打込工法），一部コ
ンクリート打放しおよび珪り仕上げにウエテキシ

塗布

開口部：昭和鋼機(株)オーダーメイド自然発色サッシ
ュ，一部型钢グラファイト処理サッシュ，旭硝子ス
ーパーサンゴールド

【内部仕上げ】

玄関ホール・ロビー・第7展示室：床・巾木＝自然
石（北木島御影）円盤摺および本磨，壁＝コンクリ
ート珪り仕上げ，プラスター中塗下地塗装仕上げ，
天井＝岩綿吸音板 天井高＝2,300 4,200～13,500
展示室：床＝ビニールホモジニアスタイル，壁＝石
綿珪酸カルシウム，板下地クロス張り，塗装仕上げ
天井＝岩綿吸音板，塗装仕上げ 天井高＝3,600
3,240 4,500～6,100

事務室：床＝ビニールホモジニアスタイルおよびビ
ニールアスベストタイル，壁＝プラスター中塗下地
塗装仕上げ，天井＝岩綿吸音板塗装仕上げ 天井高
3,400

保管庫：床＝フローリングブロック，壁・天井＝米
杉 天井高＝3.400 館長・副館長室・応接室：＝じ
ゅうたん，壁＝突板練付け，天井＝岩綿吸音板 天
井高＝2,600

【昇降機設備】

荷物用エレベーター（三菱エレベーター）：制御方
式＝交流2段速度歯車式，セレクトティブコレクティ
ブ（DWA）F操作方式，規模：容量3,000kg，カゴ
内法＝3,000×3,000×3,000，速度＝30m/min，戸閉
型式＝電動式2枚戸上下開き

【空調設備】

空調方式：展示棟＝CAV（定風量型）＋VAV（可
変風量型）方式管理棟＝VAV方式，保管庫＝露点
再熱制御方式

熱源：空気熱源スクリュウ熱回収ヒートポンプ方式

【衛生設備】

給水：ポンプ圧送方式，引込み管径80mm

排水：汚水・雑排水合流方式系統（管径300），雨水
系統（管径300）別，公設本管へ放流

【電気設備】

受電方式と契約容量：交流 3相3線式 6,000V
50Hz，電灯幹線＝交流 単相3線式 200V/100V
50Hz，分岐支流＝単相2線式200V/100V 50Hz，分
力幹線および分岐支流＝交流 3相3線式200V50Hz
電話交換方式：20回線クロスバー完全共通制御分散
中継方式

【防災設備】

排煙方式：自然排煙，機械排煙（第1，2，7展示室）

消火方式：屋外・屋内消火栓，不燃性ガス消火設備
 ハロン1301（電気室，機械室，保管庫1. 2）
 自家発電：ディーゼル機関直結交流発電機，定格出力100kVA

【その他の設備】

防犯設備：ITV カメラ設備，防犯警報装置，調光放送設備，火災報知設備

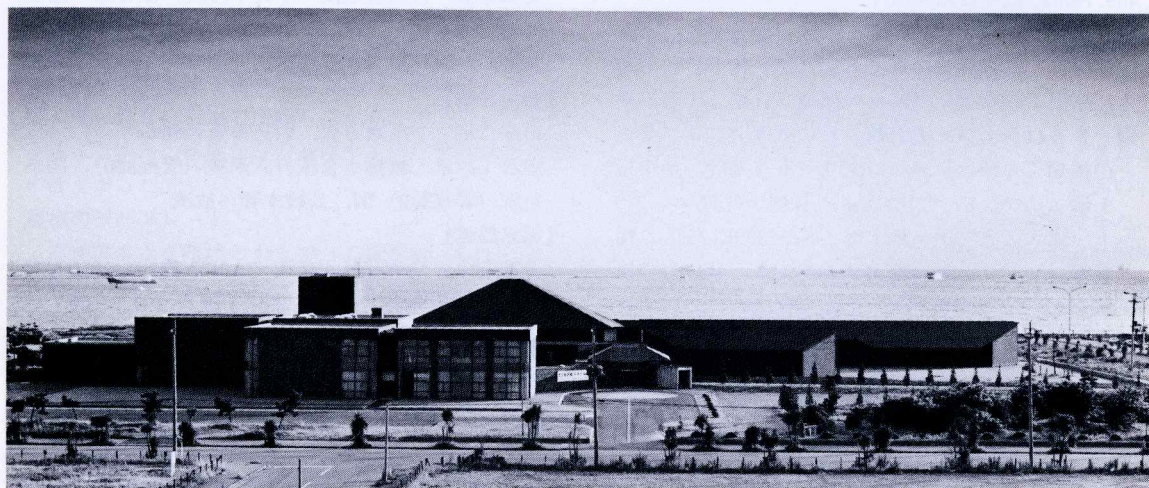
工事費

基本設計 1,300,0千円(展示棟・管理棟含む)

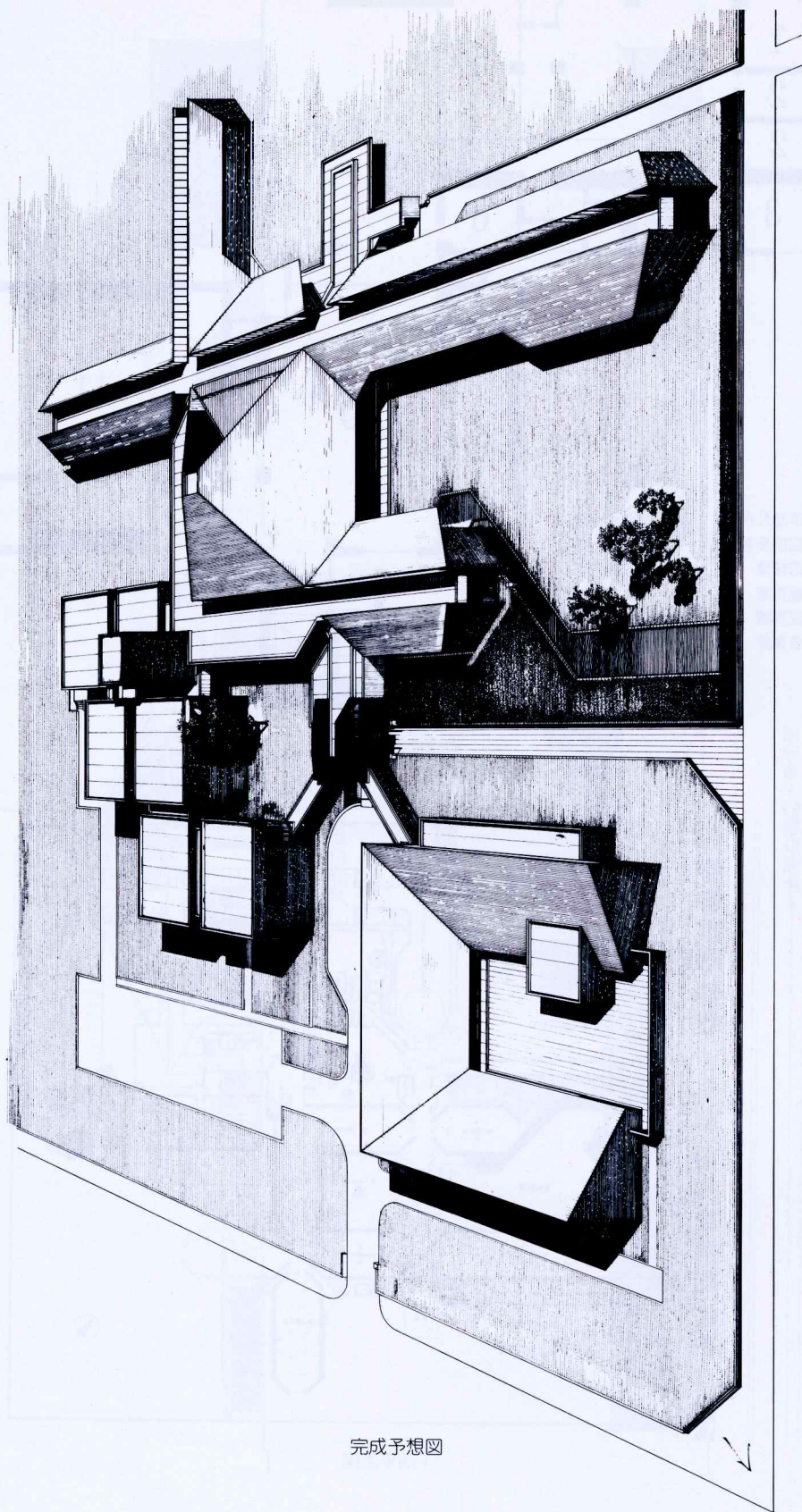
	展 示 棟	管 理 棟
実 施 設 計	1,728,0千円	1,050,0千円
杭 工 事	3,040,8千円	1,800,0千円
本 体 工 事	39,482,2千円	28,950,0千円
空調設備工事	16,555,9千円	16,085,0千円
電気設備工事	7,966,3千円	3,000,0千円
衛生設備工事	2,761,7千円	1,951,4千円
計	71,534,9千円	52,836,4千円

展示工事 ④④～④⑦ 6,500,0千円
 外構工事 ④⑨ 6,770,0千円
 ⑤⑩ 1,778,6千円
 ⑤② 1,400,0千円

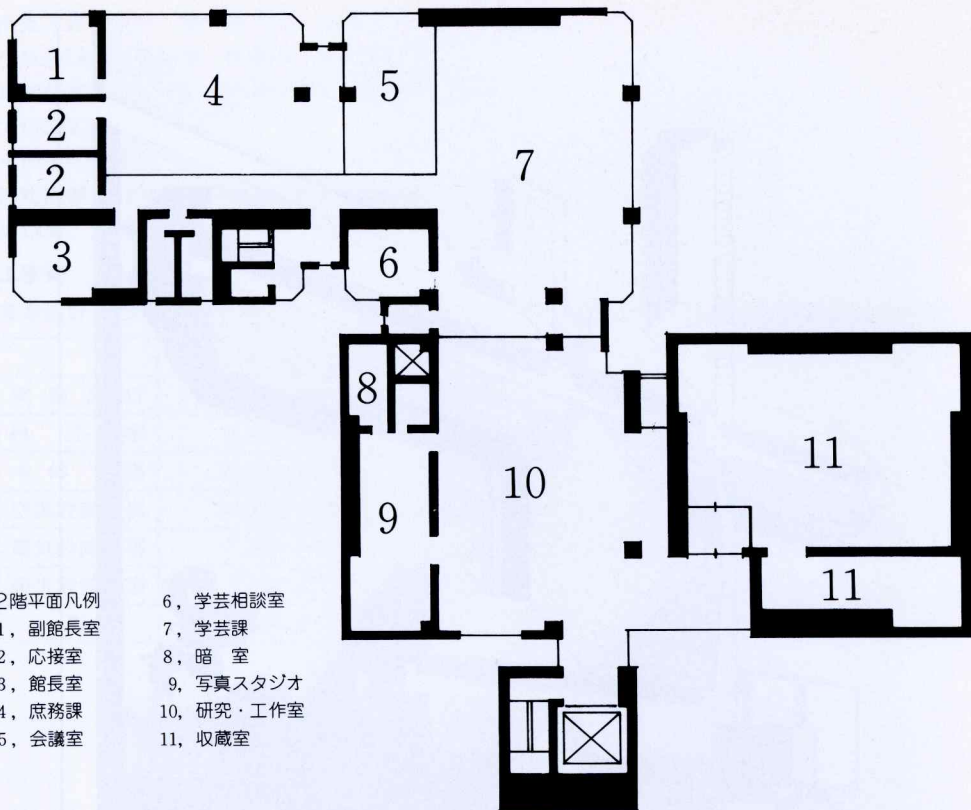
数字は年度



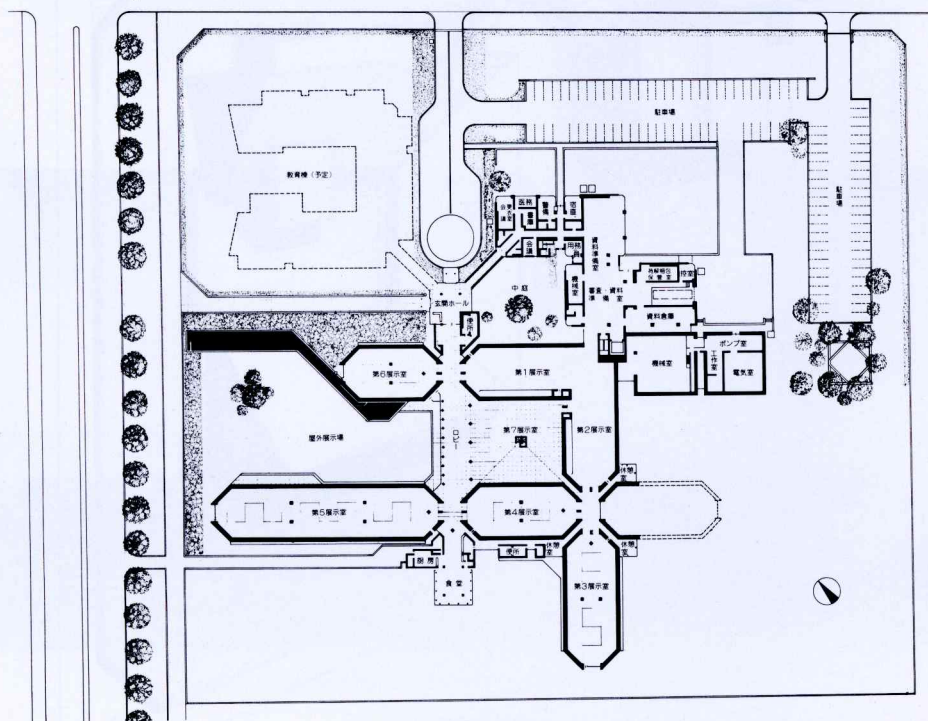
美術館全景 彰国社提供 撮影：和木通



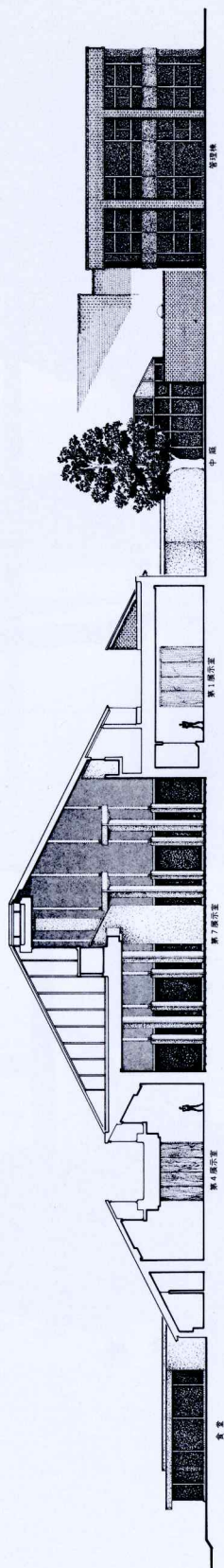
完成予想図



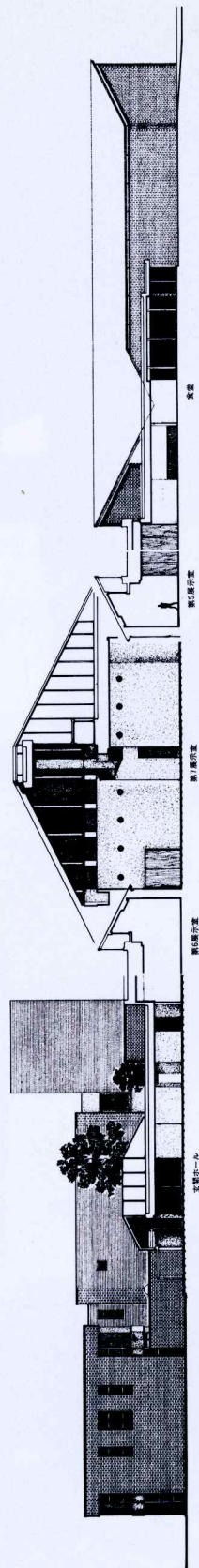
管理棟2階平面図



1階平面図



南東立面图+断面图



北西立面图+断面图

室名および面積

展 示 棟

玄関ホール	102.40 m ²	第三休憩室	23.04 m ²
クローク	91.80 m ²	便 所 A	30.24 m ²
倉 庫 A	2.70 m ²	〃 B	23.76 m ²
〃 B	2.70 m ²	身障者用便所	7.92 m ²
第一展示室	437.76 m ²	コントロール室	20.16 m ²
〃 二 〃	400.32 m ²	フィルター室	28.92 m ²
〃 三 〃	469.08 m ²	工 作 室	31.00 m ²
〃 四 〃	403.20 m ²	発 電 機 室	25.00 m ²
〃 五 〃	824.19 m ²	電 機 室	123.20 m ²
〃 六 〃	330.58 m ²	ポ ン プ 室	76.80 m ²
〃 七 〃	566.56 m ²	機 械 室	305.20 m ²
食 堂	119.52 m ²	高架水槽室	11.46 m ²
厨 房	36.00 m ²	E. V機械室	27.28 m ²
従業員控室等	17.28 m ²	E. V廻 り	54.56 m ²
食堂ホール	61.20 m ²	ダクトスペース	35.68 m ²
ロ ビ ー	335.52 m ²	廊 下 等	123.48 m ²
第一休憩室	23.04 m ²		
〃 二 〃	23.04 m ²	合 計	5,194.59 m ²

管 理 棟

(1階)

第2会議室	22.62 m ²	庶務課室	112.34 m ²
更衣室	14.83 m ²	会 議 室	43.84 m ²
医 務 室	21.18 m ²	学 芸 課 室	195.32 m ²
文 書 庫	22.02 m ²	学芸相談室	23.91 m ²
警 備 員 室	43.59 m ²	研究工作室	216.49 m ²
第一会議室	20.15 m ²	写真スタジオ	54.30 m ²
倉 庫	7.19 m ²	器 材 室	6.74 m ²
湯 沸 室	5.19 m ²	暗 室	12.19 m ²
便 所	24.54 m ²	第一收藏庫	184.40 m ²
宿 直 室	34.20 m ²	〃 二 〃	42.81 m ²
物 置	9.92 m ²	E. V 前 室	16.39 m ²
用 務 員 室	31.83 m ²	便 所	21.50 m ²
審査室・資料準備室・荷解室	520.68 m ²	湯 沸 室 A	3.24 m ²
消 毒 室	31.79 m ²	〃 B	6.87 m ²
資 料 倉 庫	124.25 m ²	廊 下 等	60.94 m ²
荷解梱包保管室	52.67 m ²	小 計	1,087.19 m ²
荷扱入控室	21.94 m ²		
機 械 室	51.74 m ²	ダクトスペースその他	3.56 m ²
廊 下 等	123.52 m ²		
小 計	1,183.85 m ²	合 計	2,274.60 m ²

(2階)

館 長 室	33.27 m ²
副 館 長 室	23.42 m ²
第一応接室	14.67 m ²
第二応接室	14.55 m ²



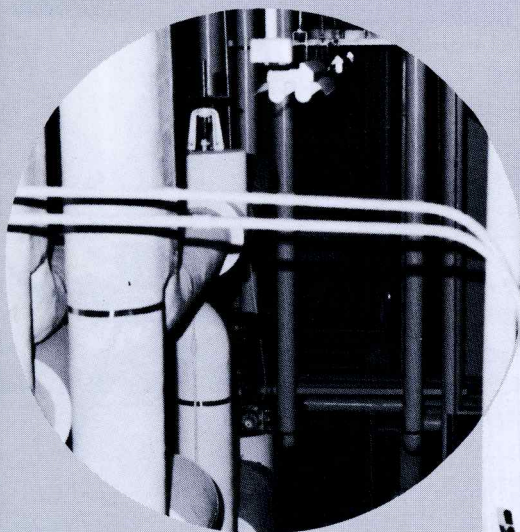
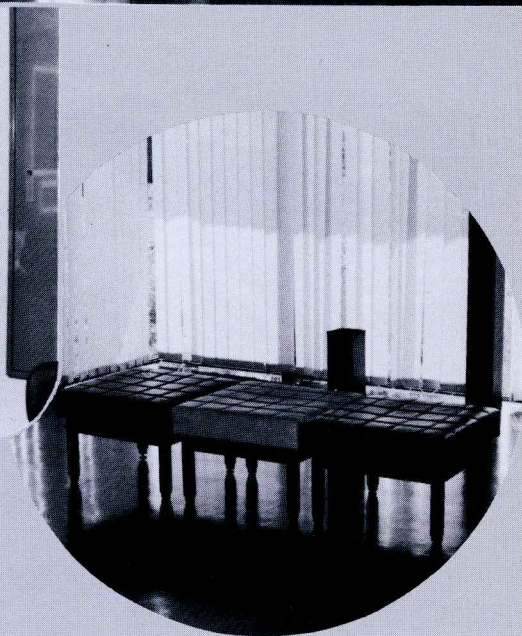
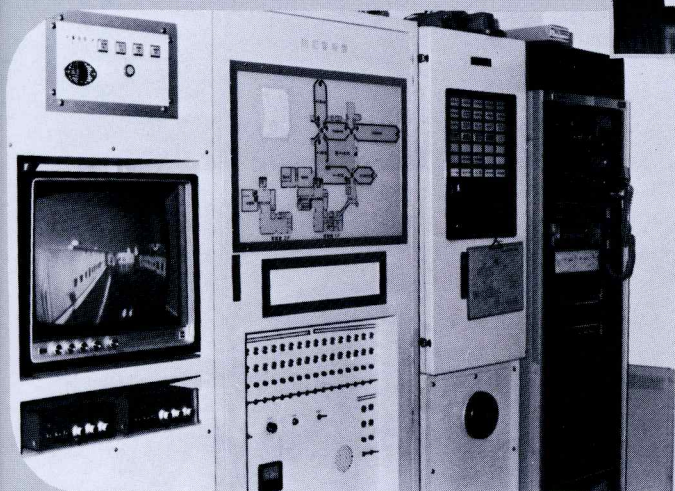
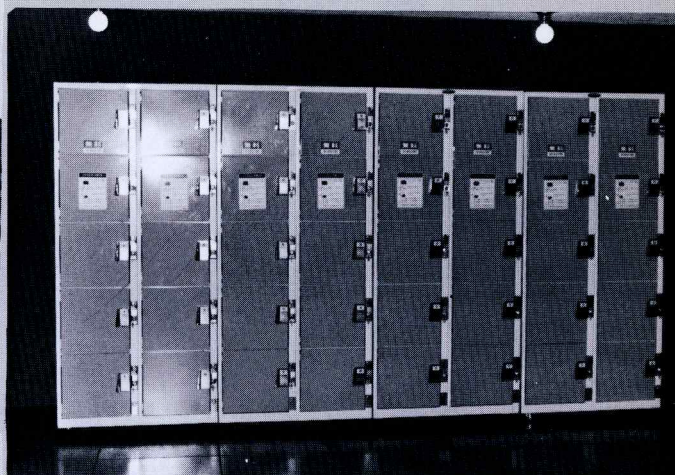
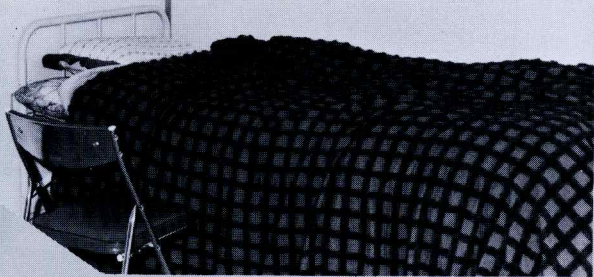
□ ビー 彰国社提供：撮影：和木通

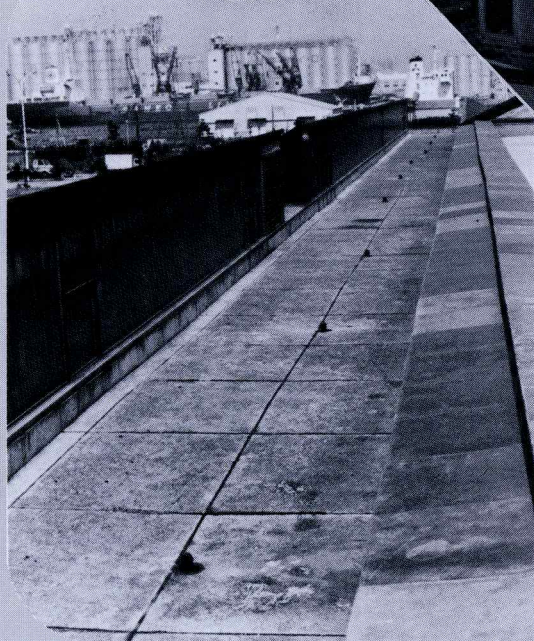
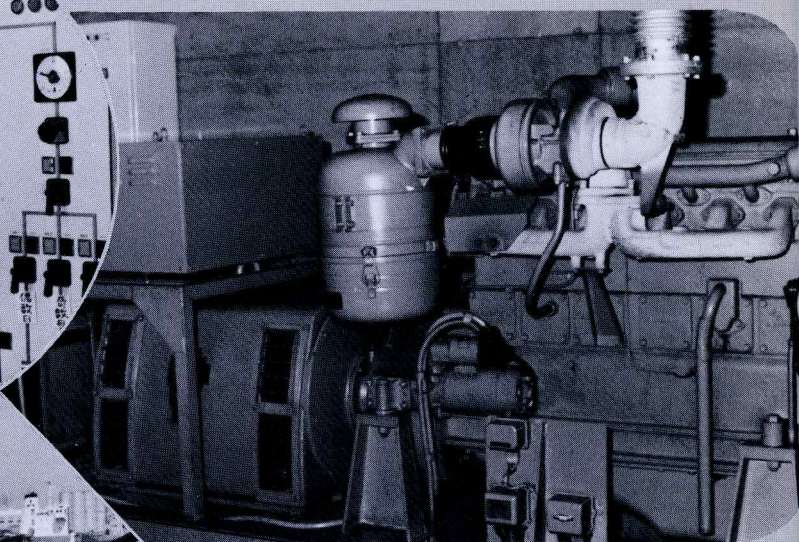
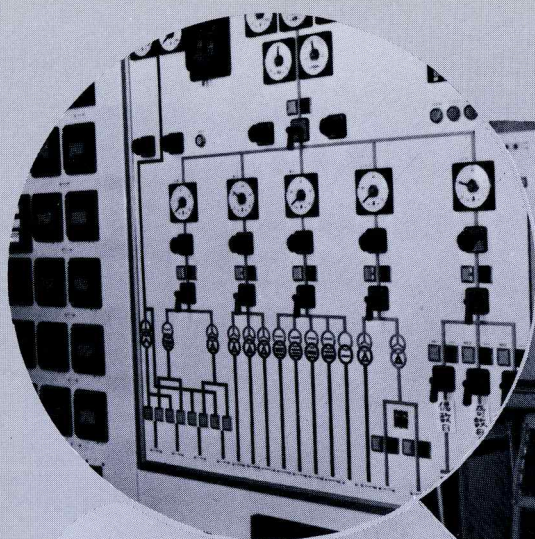




第一展示室 彰国社提供 撮影：和木通







椅子の女



事業報告

1 展覧会の開催について

特別展として、房総の風景を主題にした「海と湖沼展」が初夏に開催され、年度末には、千葉県在住30年を記念して、「東山魁夷展」が催された。九十九谷を遠望した「残照」から、唐招提寺の障壁画まで」と題して、東山芸術の軌跡を回顧した展覧会と講演会はともに日本画の真髄に触れ、入場者約41,000人から好評を得ることができた。

企画展の「現代工芸六人展」菅谷元三郎・円城寺昇の二人展」では房総の美術家を広く県民が直接親しむことができ、作品を通して、県美術史上に位置づけを行った。「第11回現代美術選抜展」世界の子どもの絵展」では、広く日本全体の美術と世界の子どもの作品を展覧し、国内美術界の展望と国際理解への一助となった。

常設展では、房総の美術家シリーズと新収蔵作品展を主とし県民の多くの人々に親しんでいただき、新規事業として移動美術館を木更津市の県立上総博物館と、館山市の県立安房博物館で開催し、積極的な地域進出は、多くの美術愛好家に、県民奉仕の美術館として受けとめられた。

2 普及事業について

新規事業として、美術普及室は、第6室に図書・展示・談話・情報・集会コーナーの場をつくり、日常生活の中で、美術に接する機会を設けている。更に夏季大学や美術講演会・美術を語る会等は、希望者が定員を大きく上まわる申込みを受け、規模を拡大して、対応するなどの要望に答えた。館報・年報・事業案内をも配布し、館行事業を広報し、奉仕活動を活発化した。

3 資料収集について

美術館資料としては、日本画・洋画・彫塑・工芸・書・版画・の部門を作品を、基礎調査の上になって購入・寄附を受け、収蔵作品を増加させ、収蔵品目録を発行し、作品整理と活用をはかっている。

4 調査研究について

企画展等では、調査研究と一環した作品展示がなされており基礎的な研究と作品についての研究が併行して追求されている。特に特別展における第二次資料室の開設は、作品、作家の生い立ちや作品の成立過程まで及ぶよう配慮がなされている。なお学芸員の個別研究は記要として発行している。

友の会も、美術鑑賞旅行を実施したり、会報の発行を行ない美術を視る目と教養を深める心豊かな生活向上に努めた。

常 設 展

房総の美術家 — 近代美術の10人 —

会 期 昭和52年4月10日～6月12日

展示点数 60点

入場者数 19,248人

房総は首都東京に隣接し、純朴な気風と、温暖で恵まれた風土変化に富んだ景観から、文人墨客の訪れることが多かった。明治以降でも著名な芸術家が写生地を求めてこの地に来た。青木繁の「海の幸」安井曾太郎の「外房風景」が房総から取材したものであることはすでに著名である。

このような影響もあって、比較的早くから中央の文化の影響を受けることが少なく、明治以降の急激に、半島という袋小路の地形は、近隣文化や通過的な文化の影響を受けることが少なく、明治以降の急激に導入された欧風文化を一方向的に受け入れることに追われ、風土や歴史的伝統に根ざした独自のものは生れにくい条件にあった。「房総美術」という概念で抱括するには、あまりにも多様な作家像である。ただ、このような中にあっても僅かではあるが房総に定住して、作家活動が続けられ、後進の育成に励んだ美術家のあったことも見逃してはならない。

近年、房総は大きく変貌しつつある。産業構造の急激な転換と、首都圏のベッドタウンとしての都市現象は、地域文化にも大きな影響を及ぼしている。著名な、あるいは新進の美術家がこのに移り住むことによって、房総の美術界に新しい息吹きが導入された。全国的に見てもハイレベルの作家が多く、今後、房総美術という狭い概念ではとらえられない多様な方向の中から、日本的あるいは国際的作家が輩出する可能性は大きい。

今回の展示は、このような房総美術の動向の一端を10人の作家によって示そうとするもので、一つの作家群は明治初期における浅井忠と、戦後における浜口陽三に見られような、房総出身で、中央の美術界又は国際舞台で活躍した人々であり、もう一つの作家群は、この地に住んで、作家活動と房総の美術界の育成に尽した人々である。

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
〈日本画〉		都 鳥 英 喜	洛 北 の 早 春
若 木 山 常 陸 乙 女		婦 人 像	
安 房 ノ 海 乙 女		八 瀬 の 秋	
海 女		原 勝 郎	モ ン マ ル ト ル
波 上 海 女 図		街 灯 の ある 風 景	
池 の 春		コ ー ヒ ー ひ き	
〈洋 画〉		京	橋
浅 井 忠	取 獲 ス ケ ッ チ	樹	
	フ ラ ン ス 風 景	デ ッ サ ン (C)	
	農 婦 像	デ ッ サ ン (H)	
	母 の 肖 像	デ ッ サ ン (M)	
	海 辺 の 少 女	石 橋 武 治	並 木 の 道
	中 沢 岩 太 像	筑 波 遠 望	
	兵 治 橋	雨 の 海 体	
	玉 川	裸	
	東 宮 御 所 壁 飾 草 稿 (I)	水 辺 初 夏	
都 鳥 英 喜	男 の 顔	椿 貞 雄	自 画 像
	巴 里 郊 外 サ ン ク ル	八 重 子 像	
		横 堀 角 次 郎 兄 像	

作家名 作品名
椿 貞雄 アンドレ 裸体
鋸山から見た房総半島

〈版画〉
浜口 陽三 う さ ぎ
緑 の ぶ ど う
ピーマンのある静物
トリコット
190 と 一匹
テーブル掛けとサクランボ
赤 い パ イ プ

〈工芸〉
津田 信夫 一 點 れい 瑠
胡 孫 遊 璃
鳳 翔 薫 目
炉

作家名 作品名
津田 信夫 こ 迷 家 ひる
北 辺 夜 猫 し
香取 秀真 鳳 凰 文 様 花 瓶
笑 獅 子 香 炉
筋 入 花 瓶
六 角 火 鉢
菊 文 釜

〈書〉
鱸 松 塘 題 山 陽 先 生 遺 像 詩
五 言 絶 句
五 言 絶 句
竹 之 図
七 言 絶 句

印刷物 目録 B5 5,000枚

房総の美術家—新収蔵作品展—

会 期 昭和52年8月5日～10月20日
展示点数 36点
入場者数 29,139人

本館では、房総美術の特質をふまえて、収蔵作品の計画的充実につとめるとともに、郷土美術の紹介につとめてきた。今期は特に近年収蔵された作品を中心に一般に公開するものである。

出 品 目 録

作家名 作品名
〈洋画〉
フォンタネージ 神 女 之 図
浅井 忠軍 軍 人 の 図
帆 船 の 図
白 浜 風 景
は た ら く 婦 人
仁 王 像
沢 入 駅
霜 鳥 之 彦 都 鳥 英 喜 像
鳩 川 誠 一 女 た ち
星 祭
田 園
ラ イ ラ ッ ク と 蝶
ノ エ ル
顔
愛
篠 崎 輝 夫 絵 馬 に よ る

作家名 作品名
鰻 嘔 C l o u d s
H e a r t s
I n s e c t s
B i r d s
A n g e l e s
溝 口 七 生 高 原 の 樹 々
〈日本画〉
鈴木 鷺 湖 農 耕 の 図
杉 原 元 人 海 花
渡 辺 学 川 口
岩 崎 邑 人 関 牛
篠 崎 之 男 瀧
〈彫塑〉
大須賀 力 椅 子 の 女
〈工芸〉
香取 秀真 霊 獣 文 大 花 瓶
土 肥 満 向 い あ う 単 体

〈版 画〉

遠 藤 健 郎 巷 の 女 た ち
池 田 満 寿 夫 ト ラ ン ラ ー ズ ・ ジ ョ イ

〈 書 〉

浅 見 喜 舟 檣 櫓
大 石 隆 子 待 君
小 暮 青 風 万 葉 集 東 歌
浅 見 錦 龍 古 泉 千 櫓 の 歌

印刷物 目録 B 5 5,000枚

房総の美術家—収蔵作家20人展—

会 期 昭和52年12月1日～昭和53年2月28日

展示点数 56点

入場者数 22,716人

今期は、第1期に加えて、本年度中に企画された「近代房総の美術家」シリーズによって、その業績の発掘につとめた作家等の作品を展示し、より巾広く房総の美術家を紹介しようとするものである。

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名
〈日本画〉	
田 岡 春 徑 竹	林
	風 林
若 木 山 早	春
	池 の 春
鈴 木 鷲 湖 農 耕 の 図	
石 井 林 響 浦 島 太 郎 ノ 図	
〈洋 画〉	
浅 井 忠 フ ラ ン ス 風 景	
	婦 人 像
	老 母 像
	中 沢 岩 太 郎
	京 都 工 芸 学 校 の 庭
	東 宮 御 所 壁 飾 草 稿
都 鳥 英 喜 男	顔
	婦 人 像
	巴 里 郊 外 サ ー ク ル
原 勝 郎 京	橋
	コ ー ヒ ー ひ き
	森 (A)
石 橋 武 治 夜	富 士
	砂 山
	白 鷺 の いる 風 景
椿 貞 雄 春 夏 秋 冬 図 屏 風 (春)	
	岩
	水 彩 画 家
渡 辺 百 合 子 庭 園 に 遊 ぶ	
〈版 画〉	
浜 口 陽 三 1 9 0 と 一 匹	

作 家 名	作 品 名
	ト リ コ ッ ト
	赤い鉢と黒いサクラランボ
浜 口 陽 三	オ の レ モ ン
	う い き よ う
深 沢 幸 雄	影 (メヒコ) A
	戦 慄 (トルソ)
	家 族
	青 い 裸 像 A
	掌 の 中 の 影
〈彫 塑〉	
大 須 賀 力 倚	る 女 像
大 川 逞 一 婦	人 像
〈工 芸〉	
香 取 秀 真 鳳 凰 文 様 花 瓶	
	笑 獅 子 香 炉
	筋 入 花 瓶
	六 角 火 鉢
	菊 文 釜 及 び 風 炉
信 田 洋 九	躍 盤
	蠟 銀 ひ さ 古 瓶
津 田 信 夫 鑄	銅 水 盤
	驚
	一 點 玲 瓏
	鳳 翔 薰 炉
	子 迷 家 鴨
〈 書 〉	
鱸 松 塘 七	言 絶 句
	五 言 絶 句

江 川 碧 澤 竹 白 雲 青 山 山 詩 山

淺 見 喜 舟 靈 龍
崔 子 玉 座 右 銘

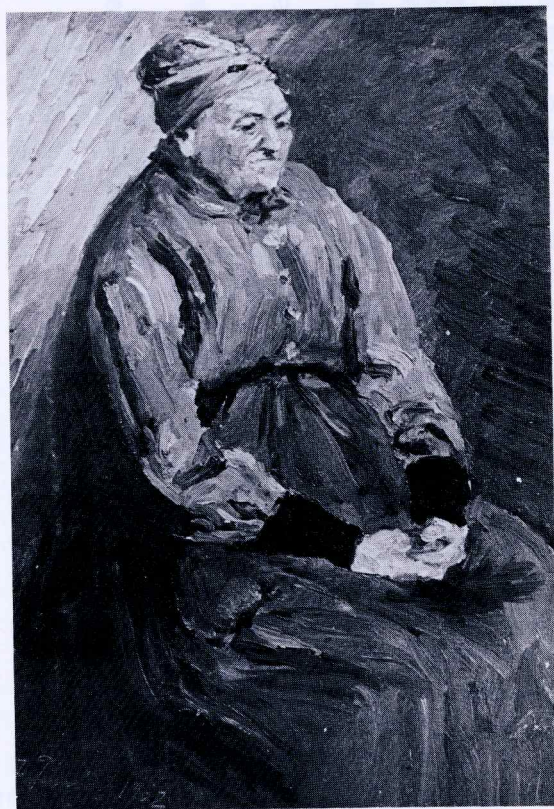
印刷物 目 録 B 5 5000枚



展示風景



靈獸文大花瓶 香取秀真



農 婦 淺井忠

特 別 展

海と湖沼展—自然との対話—

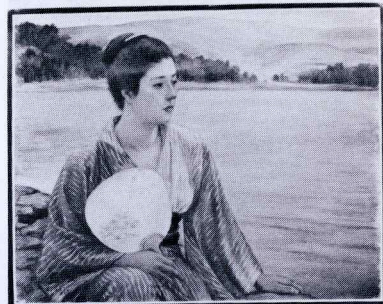
会 期 昭和52年7月1日～7月31日

展示点数 43点

入場者数 5,686人

日本の海と湖沼を題材にして絵画の歴史は古く、その多彩な質量は多くの人たちに愛好され、いまなお描かれている。

このたび—自然との対話—「海と湖沼展」として、日本の近代以降の造形美の一端を展観に供し、自然との対話の結晶を通して、海と湖沼に托された作家の情念を追いながら、自然の再発見と多様な心象表現を広く多くの人々に理解していただくために、開催するものである。



特別展 海と湖沼展

昭和52年7月1日(金)～7月31日(日)

千葉県立美術館

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名
〈洋 画〉	
浅 井 忠 漁	婦
原 田 直次郎 海	辺 風 景
黒 田 清 輝 湖	畔
久 米 桂一郎 鴨	川
藤 島 武 二 屋 島	よ り の 遠 望
石 川 寅 治 壇	の 浦
ク 犬 若	の 浜
山 本 森之助 琉 球	の 燈 台
石 井 柏 亭 朝	陽
金 山 平 三 し け	の 翌 日
辻 永 須 磨	の 朝
斎 藤 与 里 晩 秋	の 赤 城 山
黒 田 重太郎 つ い り 晴 れ	の 鏡 容 池
中 村 繁 海 辺	の 村
安 井 曾太郎 鶴 原	風 景
小 林 和 作	海
牧 野 虎 雄 磯	に て
大久保 作次郎 江	の 島 待 春
石 橋 武 治 筑 波	遠 望
ク 雨	の 海
長谷川 利 行 勝	浦
ク 外 房 州	風 景
曾 宮 一 念 中 禪 寺	湖
青 山 義 雄 鶴 原	風 景

作 家 名	作 品 名
椿 貞 雄	岩
三 田 康 冬	の 犬 吠 岬
円城寺 昇	岩
野 間 仁 根 房 州	新 緑 天 面 漁 村
小 堀 進 沖	縄
服 部 正一郎 霞 ケ	浦 筑 波
林 俊 衛 岩 和	田 海 岸
〈日本画〉	
横 山 大 観 朝	陽 映 島
小 川 芋 銭 霞	ケ 浦
吉 田 登 穀 浄	池
川 端 龍 子 海	鵜
田 岡 春 徑	幽
富 取 風 堂	朝
加 藤 栄 三 鶴	飼
東 山 魁 夷 満	声 (試 作)
時 田 直 善 早	苗 舟
若 木 山 夏	の 水
小 野 具 定 遠	く な っ た 海
渡 辺 学 川	口 (遺された人)
吉 岡 堅 二	満

《二次資料》

◎写生地としての房総コーナー

- 1 写生地としての房総地図パネル（航空写真10枚
沢本吉則撮影）
- 2 房総の海写真3枚（海の表情 沢本吉則撮影）
- 3 写生地としての房総関係写真11点
青木繁「海の幸」記念塔（館山市布良）
青木繁が滞在した小谷家（館山市布良）
中村彝「海辺の村」の現状（館山市布良）
黒田清輝「大海海岸」の現状（大原町丹ヶ浦）
安井曾太郎「鶴原風景」の現状（勝浦市鶴原）
安井曾太郎「外房風景」の現状（鴨川市太海）
石井柏亭「朝陽」の現状（銚子市外川海岸）
三田康「冬の犬吠岬」の現状（銚子犬吠埼）
天津の海岸（天津小湊町）
白浜への道（館山市布良）
布良漁港（館山市布良）
- 4 石井柏亭関係資料 2点
画作控 4冊
石井柏亭作「朝陽」の制作に関する文（本よりコピー）
- 5 浅井忠関係資料
浅井忠鉛筆画「房州白浜」
「房州白浜」
「房州白浜」
「房州乙浜村」
「印旛沼」
スケッチブック 2冊
- 6 展示書籍 3点
「浅井忠」 石井柏亭著 芸艸堂発行
「浅井忠・黒田清輝」 集英社発行
「安井曾太郎・小出檐重」 集英社発行

◎鴨川市太海画家の宿江澤館関係資料コーナー

- 1 画家の色紙絵 16点
野間 仁根・大久保 泰・中村 琢二
中沢 弘光・青山 義雄・鈴木信太郎
野口弥太郎・中村 善策・石川 滋彦
向井 潤吉・佐宗 美邦・石橋 武治
片多 徳郎・曾宮 一念・伊藤 清永
服部 亮英
- 2 江澤栄子氏肖像画 3点
大久保百合子 桐野江節雄 望月 省三
- 3 軸 物 3点

講演会 7月16日「なぜ漁民を描くか」渡辺 学
美術を語る会 7月9日「海と湖沼展をみて」遠藤 健郎

印刷物 図録 20×21 1,000部 ポスター73×51.5 1,500枚 チラシ B5 3,000枚
目録 B5 2折 5,000枚

渡辺 審也・服部 亮英・相田 直彦

4 書（海鳴りのあさのくろくも）

曾宮 一念

5 書簡類（江澤館宛） 3点

（手紙）曾宮 一念

（葉書）伊藤 清永

（葉書）小絲源太郎

6 カラー図版（中村善策 海辺の春）

7 江澤館宿帳（大正8～昭和4）

8 江澤館関係写真 12点

太海駅から画家の宿へ

画家の宿〔江澤館〕

明治時代の太海海岸

画家の宿にあった画室

画家の宿の旧館

画家の宿のロビー

画家の宿の廊下

画家の宿の壁面

海上から見た画家の宿

画家の宿から見た鴨川市街

安井曾太郎「外房風景」の現状

その他「画家の宿の紹介コラム」

◎近世版画コーナー 20点

千絵の海 下総登戸	葛飾 北斎
千絵の海 緑列利根川	〃
登戸 浦	〃
上総ノ海路	〃
下総小金原	安藤 広重
廉楚山鳥居崎	〃
上総廉楚山	〃
下総銚子の浜外浦	〃
上総笠盛寺岩作之観音	〃
下総鴻の台	〃
鴻の台と瀬川風景	〃
房川保田ノ海岸	〃
上総天神山海岸	〃
上総黒戸の浦	〃
安房小湊	〃
上総木更津海上	〃
中川口之図	〃
上総九十九里地引綱大漁獵正写之図	昇亭 北寿
下総銚子浦鯉釣舟之図	〃
利根川東岸一覽	玉蘭斎貞秀

「残照」から唐招提寺障壁画まで

東山魁夷展

会 期 昭和53年3月4日～3月31日

展示点数 61点

入場者数 41,230人

東山魁夷は、現代日本画の第一人者として注目されているばかりではなく、版画、著述、講演にと多方面にわたって活躍し、現代日本をもっとも幅広く代表する作家である。

昭和52年は東山魁夷が市川市鬼越に居を構えてから30年になる。以来この地で数多くの作品を発表してきているが、それは単にアトリエがあるということにとどまらず、昭和22年文展に発表した「残照」により千葉とのかかわりが、より深いものとなったといえる。「残照」は九十九谷を見下す鹿野山上で体験した大自然と

の感応を作品化したもので、これまでの仕事の総集の頂点として、また同時にそれ以後の展開の出発点にもなるものであった。現在制作中の「唐招提寺障壁画」は「残照」への回帰をなすものともいわれ、いよいよ高い円熟境を示している。

そこで、これを契機にその軌跡を辿るとともに、県民の長年の期待にこたえ、開催するものである。



出品目録

作 品 名	作 品 名	作 品 名
残 照 1947	月 唱 1965	石 の 窓 1971
月 宵 1948	朝 静 1966	赤 い 屋 根 1971
彩 林 1949	瀟 声 1966	マ リ ア の 壁 1971
私 の 窓 1950	夏 深 む 1968	ツ エ レ の 家 1971
霧 1951	年 経 る 樹 1968	若 葉 の 季 節 1972
門 1952	秋 寂 び 1967	湖 澄 む 1972
白 い 壁 1952	池 澄 む 1968	水 辺 の 朝 1972
晩 照 1954	雪 の 後 1968	白 馬 の 森 1972
冬 の 丘 1956	緑 の 谷 1968	森 装 う 1973
暁 1957	瀟 声 1968	春 雪 1973
秋 径 1958	溪 紅 葉 1968	夕 静 寂 1974
青 宵 1959	明 け ゆ く 山 湖 1970	山 雲・瀟 声 (試作) 1975
簾 1959	泉 1970	秋 深 1975
残 陽 1960	水 辺 の 町 1970	雲 湧 く 嶺 1976
森 の さ さ や き 1963	静 か な 町 1970	雲 立 つ 嶺 1976
リ ー ベ の 家 1963	森 の 幻 想 1970	溪 若 葉 1976
古 い 壁 1963	曠 原 1971	緑 潤 う 1976
ス オ ミ 1963	夕 べ の 聖 堂 1971	山 嶺 白 雲 1976
山 湖 遥 か 1964	湖 青 む 頃 1971	桂 林 月 夜 1976
湖 静 1964	緑のハイデルベルク 1971	
春 来 る 丘 1965	窓 1971	

《二次資料》

●唐招提寺障壁画

スケッチ	33点	山景	16点
		海景	15点
		樹木	2点
小下図	1点	山雲濤声	1点
中下図	6点	山雲	3点
		濤声	3点
試作	7点	山雲	4点
		濤声	3点
割出図	6点	山雲	3点
		濤声	3点
大下図	6点	山雲	4点
		濤声	2点

●日展出品作品等の小下図 21点

たにま・光昏・山かげ・秋翳・暮朝・雪降る
 黄耀・映象・雪原譜・冬華・白夜光・月簾・
 溪紅葉・みづうみ・雪の城・白馬の森・春雪
 夕静寂・秋深・山嶺湧雲・凍池

●唐招提寺写真 7点

講堂
 鑑真和尚像
 観月会
 唐招提寺金堂
 金堂の夜景
 境内の講堂及び鼓楼
 唐招提寺金堂

●制作中の写真 12点

山雲A、B、C 犬吠崎にて 茶室にて
 濤声A、B 奥穂高にて
 試作A 仕上げる筆を入れる
 制作中の画室にてA、B

●唐招提寺障壁画完成写真 5点

震殿の間A、B
 御影堂上段の間
 震殿の間より上段の床の間を見る
 上段の間の床の間と床脇棚

《図書》

●著書

『わが遍歴の山河』新潮社	1957
『私の窓』新潮社	1961
『白夜の旅』新潮社	1963
『風景との対話』新潮社	1967
『馬車よ、ゆっくり走れ』新潮社	1971
『泉に聴く』毎日新聞社	1972
『唐招提寺への道』新潮社	1975
『六本の色鉛筆』新潮社	1976
『日本の美を求めて』講談社	1976

●画集

『東山魁夷』三彩社	1958
『東京』弥生画廊	1959
『東山魁夷作品集』三彩社	1962
『森と湖の国』美術出版社	1963
『古き町にて』(リトグラフ) 明治書房	1964
『KAI HIGASHIYAMA』(英文画集) 三彩社	1965
『朝明けの潮』三彩社	1968
『画集東山魁夷』三彩社	1969
『京洛四季』新潮社	1969
『京洛小景』(孔版画) フジ美術	1971
『窓』新潮社	1971
『東山魁夷代表画集』集英社	1971
『古都を描く』集英社	1972
『白い馬の見える風景』新潮社	1973
『四季』毎日新聞社	1974
『唐招提寺御影堂障壁画』日本経済新聞社	1975
『青の世界』美術出版社	1976
『詩画集・コンコルド広場の椅子』求龍堂	1976
『海と山』(リトグラフ) アポロ・アート	1977
『秋風行画卷』毎日新聞社	1977
『KAI HIGASHIYAMA』(英・仏・独文画集) 美術出版社	1977
『東山魁夷自選画集』美術出版社	1977
『東山魁夷昭和三大障壁画』実業之日本社	1977
『東山魁夷代表作十二選』集英社	1977
『大地悠々』日本経済新聞社	1977
『東山魁夷の世界』毎日新聞社	1978

●全集

『日本の名画28東山魁夷』講談社	1972
『現代日本の美術東山魁夷』集英社	1974
『現代日本の美術東山魁夷』(ヴァンタン版) 集英社	1976
『日本の名画25東山魁夷』中央公論社	1977

●展覧会図録

東山魁夷瀟湘スケッチ展 銀座松坂屋	1938
現代作家デッサン展・東山魁夷 朝日新聞社	1958
東山魁夷自選展 朝日新聞社	1961
北吹風景画展 日本橋高島屋	1963
東山魁夷代表作品展 神戸新聞社	1963
京洛四季・朝明けの潮展 銀座松屋その他	1968
東山魁夷 毎日新聞社(大阪)	1969
東山魁夷 日本経済新聞社	1971
古都を描く・窓展 日本経済新聞社	1971
東山魁夷展 高知県立郷土文化会館	1972
京洛四季 習作とスケッチ展 千葉ニューナラヤ	1972
白い馬の見える風景展 銀座松屋	1973
東山魁夷展 岩手日報社	1974

唐招提寺障壁画展 日本経済新聞社 1975
 唐招提寺障壁画習作展 パリ吉井画廊 1975
 東山魁夷展 北国新聞社 1976
 京洛四季習作展 パリ吉井画廊 1976
 東山魁夷の歩み展 神戸新聞社 1976
 東山魁夷展 渋谷東急 1977
 中国の旅水墨画展 パリ吉井画廊 1977
 唐招提寺展 プチ・パレ(パリ) 1977

東山魁夷展 千葉県立美術館 1978

●その他

東山魁夷・人と芸術 日本美術社 1972
 三彩(増刊号)東山魁夷の歩いた道 三彩社 1972
 東山魁夷 時の美術社 1973
 三彩(特集号)東山魁夷 三彩社 1977



講演会	3月18日「美との巡りあい」	東山 魁夷
美術を語る会	3月11日「東山魁夷の人と芸術」	桑原 住雄
映画会	3月4日「夕静寂を描く」	
	3月25日「唐招提寺障壁画」	
印刷物 図録	24.2×25 3000部	ポスター 73×51.5 2000枚
		チラシ B5 2折 25000枚

企画展

房総の美術家シリーズ 6

現代工芸六人展

会期 昭和52年 9月10日～10月16日

展示点数 36点

入場者数 16,983人

生活の中から生まれた工芸は、美術工芸として帝展等にその基盤を定着させ、また多くの団体が誕生し、新たな展開を示し。

その中において、本県の工芸作家には、香取秀真（鍔金）津田信夫（鍔金）等の近代工芸の先覚者があり後に続く作家として、戦前より常に新鮮な感覚と豊かな技術に支えられた作品を発表し続けている土肥刀泉（陶芸）、宮之原謙（陶芸）、山本正年（陶芸）、信田洋（彫金）、青木滋芳（染色）、二口志保子（染織）等の諸氏がいる。

本展においては、これら6人の作家に焦点をあて、それぞれの美の世界を広く公開するものである。



出品目録

作家名	作品名
土 肥 刀 泉	琅 瓷 双 和 花 瓶
	青 瓷 花 瓶
	青 瓷 一 輪 生
	辰 砂 花 瓶
	辰 砂 一 輪 生
	琅 瓷 花 瓶
宮之原 謙	釉 彩 花 瓶
	象 嵌 地 鉢
	象 嵌 磁 サ ボ テ ン 黒 和 壺
	緑 陰 大 皿
山 本 正 年	彩 盛 磁 牡 丹 唐 草 大 壺
	瑞 光
	湖
	均 窯 花 生
	均 窯 花 生
	印 華 文 花 生
	青 藍 和 花 生
	窓 花 生

作家名	作品名
信 田 洋	装 瓶 (桜)
	装 瓶 (黒 艦)
	透 壺
	帯 装 瓶
	立 姿 瓶
	透 し 銅 皿
青 木 滋 芳	花 器 (伸びゆく湾)
	門
	海 蝕
	朝
二 口 志 保 子	雪 原
	春 雪 道
	雪 の 参 訪 問
	紬 織 屏 風
	静 け し 屏 風
	玉 ネ い 陽
	赤 い 陽

美術を語る会 9月10日「現代工芸を語る」 金子 量重

印刷物 ポスター73×51.5 1500枚 目録 B 5 5000枚

菅谷元三郎・円城寺昇展

会 期 昭和52年12月20日～昭和53年 1 月25日

展示点数 66点

入場者数 6,588人

房総の地は海と川に囲まれた自然環境と、首都に隣接している地理的条件から、古来から美術家の訪れるところとなり、多くの名作の誕生地として知られている。

この地に生れ、育ち、房総の自然と人生を肌で感じ、ひたすらそれを追い求めた、菅谷元三郎と円城寺昇とともに昭和初期から第二次大戦前後の激動の時代に、帝展、文展、日展を舞台として多くの作品を発表しつづけてきた。その作風は堅実な写実であって派手さがないことと、将来の大成を期待されながら、戦後の混乱期に世を去ったため、埋没した美術家となろうとしている。

この作家の業績を、房総の美術家シリーズ7として、埋れた作品の発掘を通して顕彰するとともに、まだまだ埋れている美術家の発掘をつづける足がかりとするものである。



出 品 目 録

作家名	作 品 名	作家名	作 品 名	作家名	作 品 名
菅谷元三郎	風 景	菅谷元三郎	少 女 (赤い服)	円城寺 昇	岩
	肖 像 画		肖 像 画		御 宿 風 景
	日 本 画 (1)		風 景		漁 村
	日 本 画 (2)		支 那 服 の 娘		岩
	肖像画 (はる)		幕 張 風 景		十 和 田
	肖像画 (みつ)		花		風 景
	肖像画 (峰蔵)		少 女 像		杜 (習作)
	肖像画 (治兵衛)		神 戸 風 景		静 物
	肖像画 (衛治郎)		沼 風 景		崖
	菅谷浅五郎先生		農 娘 二 人		裸 婦
	消 像 画	円城寺 昇	崖		岩
	消 像 画		風 景		杜
	検 見 川 風 景		岩		自 画 像
	婦 人 像		岩		岩
	老 人 の 像		岩		少 女 像
	母 の 像		庭		父 の 像 (峰松)
	母 の 像 (習作)		裸 体		風 景 (海辺)
	自 画 像 (習作)		森 の 中		堀 割
	風 景		少 女 像		静 物
	好 高 山 の 秋		奥 入 瀬		風 景

作家名	作品名	作家名	作品名	作家名	作品名
円城寺 昇 奥 入 瀬	肖像画	円城寺 昇 静 物	信州風景	円城寺 昇 静 物	子
美術を語る会 1月14日「菅谷元三郎・円城寺昇を語る」大須賀 力、白井 三郎					
印刷物	ポスター 73×51.5	1500枚	目録 B 5	5000枚	

文化庁提供

第11回現代美術選抜展

会 期 昭和53年1月29日～2月17日

展示点数 73点

入場者数 7,523人

第11回を迎えた現代美術選抜展は、東京で毎年展覧会を開く美術公募団体から推薦された受賞作品を中心に現代美術の動向をひろく公開するため、文化庁が企画した巡回展で、全国で4会場で開催は四国の3県と本館にて開催される。

ここにえらばれた作品をとおして、多くの方々が多様化する現代美術をより深く理解していただければ幸いである。

なお、本県関係の出品者では、高畑郁子(日本画)、後藤純男(日本画)、石川三知代(洋画…本館友の会会員…)、山田和枝(洋画)の4名である。



出 品 目 録

作 家 名 作 品 名

〈日本画〉

川 端 健 生 遠 野 綾 織 村	
柴 田 長 俊 群	衆
高 畑 郁 子 塔 門 の 人 々	
村 松 秀太郎 予	感
市 野 龍 起	群
岩 倉 寿 山	里
榎 本 健 一 サ ー カ ス の 少 女	
川 島 睦 郎	爽
河 村 源 三	ン
坂 根 克 介 帽 子 の 女 子	
土 屋 礼 一 暮 れ て 行 く	
濱 田 台 兒 花	容
前 田 米 子 盛	粧
大 失 紀 北	岬
岡 本 彌 壽 子 夢 の う た	げ
菊 川 三 織 子 白	い
後 藤 純 男 仲	秋
松 本 哲 男	巖

作 家 名 作 品 名

下 保 昭	魔
吉 岡 堅 二 炎	上
〈洋画〉	
石 川 三知代	青 い 樹 か げ
加須屋 万 美	Church 一夢 幻一
藤 原 洋次郎	賢 者 の 欲
山 本 博 康	夢 転 I
谷 口 昌 之	'77-3
中 島 隆	包む・ビニール・Nov.
磯 村 敏 之	埋 立て の 工 場 敷 地
森 田 六 男 二	人
中 村 晃 子	キ ャ ナ ル
広 川 稔 子	び ん
藤 原 眸	遊 化 一 肖 像
堀 越 政 寿 五	名
奥 田 紘	試 算 さ れ る カ ー ド
鬼 頭 曄	ユ ー ト ビ ア
上 田 敏 和	ボイラーのにおいてある風景

作家名	作品名
米原 智	マリオネットの部屋
熊谷 邦子	白 い 風
高根沢 政子	ほ う ず き 市
寺田 竹雄	ア ラ ビ ア の 女
土岐 国彦	三 月 堂
橋本 房男	女神 つ ど い 給 う
松井 正之	ゲ ー ム A — 76
伊藤 清水	曙 光
伊藤 正規	庭
工藤 和男	初 冬 の 海
内藤 定昭	千 手 堂
浪打 栄光	にわとりを売る人
能登 靖幸	塔
渡辺 啓輔	雪 の 朝
太田 俊伸	「座 標」 III
山田 和枝	闇 の 中 の 神 話
絹谷 幸二	アンジェラと蒼い空II
寺島 龍一	二 人 の 肖 像
〈版 画〉	
岡部 和彦	M E R V II
天野 純治	EDGE77-E-2(Screen Frottage)
	EDGE77-E-5(Screen Frottage)

作家名	作品名
坂元 廣範	3原色による“spread”プラン / “spread”された3原色
吉田 和枝	Lebun — 浜
竹田 鎮三郎	この地上に生まれたもの
〈彫 刻〉	
勝又 豊子	日常からの逃避
中村 滝雄	(MNA & WOMAN)
猪瀬 清四郎	拭 く 女
笹戸 千津子	腰 を お ろ す 女
長嶋 栄次	ふ た り
驚崎 直子	修 羅 (OKANI)
恩田 静如	愛の終曲と生の始まり
川岸 要吉	曙
神戸 峰男	裸 婦
佐藤 助雄	地 と 風
丹羽 武雄	微 風
恵 晋	収 差
植木 力	浴 後
山本 常一	夜 の 刻

印刷物 ポスター 73×51.3 1000枚 図録 24.4×18.3 500部 目録 B5 5000枚

—日本と外国33か国の心を結ぶ—

世界のこどもの絵展

会 期 7月26日～8月28日

展示点数 170点

入場者数 9,662人

本館では、開館以来、日本の子どもの優れた絵を展覧し、美術教育の振興の一助としてきた。

今回は、諸外国の子どもの絵も加え、同時代に生きる世界の子どもたちの生活環境や、地域風土による表現の多様性を、発達段階に応じて展覧し、各国の子どもの心を結ぶとともに、絵画に対する子どもの関心と、父母および教育関係者等の理解を深め、美術教育の振興に寄与したい。

出 品 参 加 国

イギリス	スウェーデン	タンザニア	香 港	韓 国	グアテマラ
フランス	フィンランド	イスラエル	台 湾	オーストラリア	ドミニカ
ベルギー	西 ド イ ツ	アフガニスタン	フィリピン	カ ナ ダ	エルサルバドル
デンマーク	ス イ ス	スリランカ	マレーシア	アメリカ合衆国	コスタリカ
ノルウェー	イ タ リ ア	ビ ル マ	インドネシア	メ キ シ コ	エクアドル
チ リ	コロンビア	ウルグアイ			

印刷物 案内状 22.7×11.5 2000枚

千葉県移動美術館

会 期 千葉県立上総博物館
昭和52年11月2日～13日
千葉県立安房博物館
昭和52年12月4日～18日

展示点数 34点

入場者数

県立上総博物館 1,638人

県立安房博物館 2,755人

千葉県立美術館は、昭和49年10月に開館して以来、郷土に關係のある美術家の再評価と顕彰を目的の一つとして資料収集あるいは展覧会などを行ない、県民に親しまれる美術館をめざし、千葉県の実術振興を図ってきた。このたびは、その一環として、より広く県民の皆様に鑑賞いただくために、本年から移動美術展を行なうことに致しました。

今回は、本館が収蔵している作品の中から主として房総に關係深い作品を中心に、洋画、日本画、書、工芸、彫塑の5部門33点に加え、特別出品として、佐倉藩出身の浅井忠の作品「農婦」及び関連資料の一部を公開することとした。

本展覧会は、県立の美術館と博物館が事業提携して、県立美術館が所蔵している作品の中から、主として房総を主題とした作品を中心に、洋画・日本画・書・工芸・彫塑の5部門33点に加え、特別出品として佐倉藩出身の浅井忠の作品「農婦」とその関連資料の一部を巡回展として公開し、郷土の美術家の作品をさらに多くの県民に触れ合う機会を拡大して、観覧者各位の心の糧となればと企画したものである。



千葉県立美術館収蔵作品による

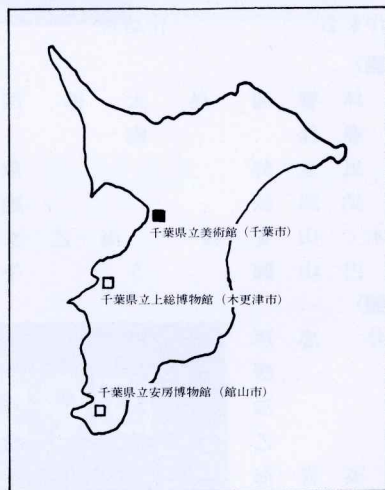
千葉県移動美術館

52.11.3日～13日

開館時間 9:00～4:30 (月曜休館)
千葉県立上総博物館
千葉県市大田山公園内
TEL. 0438-23-8811

52.12.4日～18日

開館時間 9:00～4:30 (月曜休館)
千葉県立安房博物館
館山市麓山1564
TEL. 04762-2-8868



県立上総博物館



県立安房博物館

出品目録

作家名	作品名
〈日本画〉	
石井林響浦島太郎図	
田岡春徑幽	
富取風堂群魚	
島多訥郎秋趣	
若木山安房・海乙女	
岩崎巴山闘う牛	
〈洋画〉	
浅井忠房州白浜(1)	
	房州白浜(2)
	浪太村
	乙浜村
都鳥英喜海兵風景	
石橋武治水辺初夏	
椿貞雄鋸山からみた房総半島	
	鴨図
林倭衛岩和田海岸	
大久保作次郎丘上の鐘桜	
三田康冬の犬吠岬	
無縁寺心澄銚子大新楼上にて	

作家名	作品名
国松伽耶	港風
山谷欽一	
桜田精一太	海市メ
遠藤健郎朝	
深沢幸雄ヒ	
〈書〉	
鱸松埜題山陽先生遺像詩	
	五言絶句
千代倉桜舟斎藤茂吉歌	
種谷扇舟故郷の山河	
浅見錦龍古泉千櫨の歌	
〈工芸〉	
津田信夫	鴨
信田洋伸	びゆく湾寺
青木滋芳笠	森
〈彫塑〉	
大川逞一聖	観音
藤野天光希	望原
石井滋草	

〈特別出品〉浅井忠関係資料

農婦1902年(明治35年)制作 山狩図草稿 筑波日記 寒月・水仙 彩画初歩・中学習画帖 図案草稿「画吉祥天」 図案草稿「扇面」 浅井忠使用絵具箱 工部美術学校時代写真 山狩図制作風景写真 弔詞及び弔電報印刷物 ポスター 1000枚 目録 B5 2折 5000枚

昭和52年11月2日

美 県

株式会社 オープニングコンサート
 代表取締役社長 山本 友一（元・日本放送協会）
 代表取締役専任 菅原 洋一（元・NHK）
 第 21 回 短 大 会
 第 46 回 三 曲 演 奏 会
 第 12 回 山 本 大 会

第28回茶華道展(茶会23日) 4月22日(土) 東京文化会館

	第1回園芸賞贈呈式「鎌倉音楽祭」	出展	鎌倉市立音楽会
	第27回千葉商業美術展	出展	千葉商業美術会
	芸術祭特別公開演「おかしなレディ」 「おかしなレディ」の音楽会	出展	東京文化会館
	第12回新音楽フェスティバル	出展	東京文化会館
	文化庁学芸部主催「新曲」	出展	千葉市立音楽会
	文化庁学芸部主催「新曲」 「新曲」の音楽会	出展	千葉市立音楽会
	第1回園芸特別公開演「おかしなレディ」	出展	東京文化会館
	第3回現代バレエ合同公演	出展	千葉市立音楽会
	写真展発表「伝統を守る人々」	出展	千葉市立音楽会
	第5回園芸賞贈呈式「美術・工芸・音楽展」	出展	千葉市立音楽会
	第14回日本舞踊公演	出展	千葉市立音楽会
	第30回高等学校演劇公演	出展	千葉市立音楽会
	時刻計測大会	出展	千葉市立音楽会
	第8回演劇祭	出展	千葉市立音楽会
第4回民謡・民謡フェスティバル		出展	東京市立音楽会

問合せ先 振替の会場又は千葉県教育庁文化課 0472-23-4129

29回

52年11月2日→13日
午前10時より午後4時30分まで
・月曜休館

会場・千葉県立美術館
主催・千葉県美術会
千葉県教育委員会
千葉県
部門・日本画・洋画・彫塑
工芸・書道

第9回千葉県高等学校芸術祭
美術 工芸・書道展

会 期 昭和52年11月19日～11月27日（8日間）
主 催 千葉県高等学校芸術祭実行委員会
千葉県教育委員会

高等学校美術科、工芸科、書道科の一年間の平常授業での成果と、課外活動での成果及び教員の研究作品を展示し合うことにより、生徒は創作活動を刺激され他校の情況を知り、教員は他校との比較で教育効果、方法について研究することを直接に目指し、間接には千葉県の芸術活動を昂揚することを目的とする。

参加状況

部 門	書 道	美術・工芸	計
生 徒	68校	52校	120校
教 員	68校 72名	14校 14名	82校 86名
計	136校	66校	202校

印刷物 ポスター 36.4×51.2 500枚
目 録 B 5 版14頁 2000部

昭和52年度千葉県芸術祭

伝統を守る人々写真展

会 期 昭和52年11月19日～11月27日（8日間）
展示点数 40点

古くからのくらしの中から、うけつぎ、鍛えぬいた業を保持している方々を写真でとらえ、千葉県の文化向上に資するとともに、プロ写真家の秀れた作品を広く県民に紹介する。

第 9 回

千葉県高等学校

芸術祭

ART FESTIVAL

連合音楽会

千葉県文化会館大ホール AM10:00～PM4:00 11月6日(日)

美術工芸書道作品展

千葉県立美術館 AM9:00～PM4:00 (PM3) 11月19日(土)→27日(日)

千葉県高等学校演劇祭

千葉県教育会館 AM9:00～PM5:00 11月26日(土)→27日(日)

主催 千葉県高等学校芸術祭実行委員会 / 千葉県教育委員会

事務局 千葉市花輪46 千葉南高等学校内 TEL 0472(64)1362



●団体展

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第4回全日本書の友会展	全日本書の友会、一般の書の技術向上を目的とし、文化的意義を深める為の展覧会とした。	52.4.12 ～4.27	235
第4回千葉工芸会展	工芸における原点を考えながら、生活空間からなる造形性を各作家の専門的分野より創造し、技術の開発等の発表を試みた。	52.4.26 ～5.6	85
歩 会 第 3 回 展	彫刻の本流に基づいた作品を発表することにより、県の美術文化に寄与することを念じて行つた。	52.4.26 ～5.8	61
千 葉 新 協 美 術 展	県内に在住する会員の研究発表を目的とする。ものであり、油絵と水彩画を主に展覧した。	52.5.3 ～5.8	103
二 科 千 葉 支 部 展	千葉県美術文化の発展と県民の情操文化の高揚につくすことを目的とし、支部会員及び一般公募やジュニア部の作品を発表した。	52.5.10 ～5.15	773
水 彩 連 盟 千 葉 支 部 展	現代水彩画の確立と普及をめざす本会の主旨に従って、努力している県内同人の作品を展示した。	52.5.10 ～5.15	36
墨 の 県 展	東洋画の心であり、国画としての水墨画を千葉県に普及し、広く芸術心を高める作品を発表した。	52.5.17 ～5.29	293
第24回千葉県書道協会展	一流一派に偏しない総合的書道文化の向上をめざすために展示し、半切以内の作品を表装して展示した。	52.5.31 ～6.5	253
独 立 千 葉 在 住 者 展	気鋭に満ちた作品を発表し県民の美術愛好の諸氏及び広く関東一円の方々のご高覧頂くために展示した。	52.6.14 ～6.26	105

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第 5 回 千 葉 書 壇 秀 抜 点	現代書道界の代表作品を一堂に集め、書道界の普及と振興をはかる	52. 6. 28 ～7. 3	281
第 1 回 千 葉 美 術 シ ン ポ ジ ウ ム 展 & 青 枢 展	1,000号をこえる大作を含め、全国に公募した作品を集め、人間らしさとは、人間の生命とはという命題をもって絵画空間の創造をはかる。	52. 7. 12 ～7. 24	257
第 3 回 児 童 合 同 美 術 展	児童の自由なる美術能力の開発、および技術の向上をはかりながら共に学び、人間性の根本的創造を豊かに伸ばすことを目的とした。	52. 8. 2 ～8. 7	905
第 2 回 子 ど も と 教 師 の 作 品 展	造形教育の立場から絵画制作活動の結果を多面的な表現で発表し、創造性を伸ばし育てる機会とした。	52. 8. 16 ～8. 21	295
明 る く 楽 し い 家 庭 づ くり ポ ス タ ー 標 語 展	健全な家庭生活の普とその推進の一環として、県下小・中学生から作品を募集し展示を行い優れた作品を発表した。	52. 8. 16 ～8. 21	1,005
第 7 回 い て ふ 会 彫 刻 展	教職にある者が美術教育に専念する一方で、それぞれの制作に励み自からを磨いている成果を世に問うものとして展示した。	52. 8. 23 ～8. 28	47
千 葉 市 教 職 員 美 術 展	千葉市教職員の図工・美術教育の向上のため、教職員の資質の向上を図る目的で、彫塑、絵画、工芸の各作品を発表した。	52. 8. 23 ～9. 4	115
書 道 芸 術 院 南 関 東 展	創立30周年記念書道芸術院理事作品移動展、白扇書道会第16回展、千葉県拓本展、書道芸術院南関東支局会員展を総会展示し、新しい芸術の書を普及鑑賞の資とした。	52. 9. 6 ～9. 11	2,217
問 わ れ る 表 現 展	抽象的な作品を制作しているグループの日頃の成果を発表し、抽象画の普及とともに、一般参観者の声を反映させ、今後の制作のかてとしたい。	52. 9. 13 ～9. 18	45

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第 6 回 写 真 千 葉 県 展	県内全写真人の創意・創作の意欲を燃やした作品展で教養と文化の推進を図り、写真人の交流を深めた。	52.9.13 ～9.18	249
千 葉 新 象 展	現代美術の方向をめざし、平面作品を中心に立体作品をまじえ、自由な芸術活動を理想にかかげ、大胆な研究・実験の場とした。	52.9.20 ～9.25	31
文化書道千葉県連合会展	児童生徒の書技向上、情操教育を助長しながら正しい教育的、実用的書風を主として、芸術性のある文字を書くことを目的として展示した。	52.9.20 ～9.25	783
モダンアート協会 千葉県在住作家展	中央で活躍している県在住美術作家が、県内でも発表することが県美術界にとって望ましいため、絵画、彫刻、版画、デザイン等各部門の作品を展示した。	52.9.20 ～10.2	42
第 24 回 勤 労 者 美 術 展	県内勤労者が余暇を利用して創作した美術品の発表の場を提供することによって文化的教養の向上をはかった。	52.9.27 ～10.2	223
第 9 回 ファンシー洋画展	会員各自が多くの人々に作品を鑑賞頂き、謙虚に批判を受け、以後の制作活動のかてとするために発表した。	52.9.27 ～10.2	105
千 葉 市 水 墨 画 同 好 会 連 合 会 展	水墨画のより一層の振興と向上をはかるため、同好者による連合会展で広く県民の鑑賞の場をつくった。	52.9.27 ～10.2	478
第 7 回 新 構 造 千 葉 支 部 展	新構造の存在を明確にしながら、同好の士に発表の場を提供するとともに人材発掘の場とした。	52.10.4 ～10.10	156
千 葉 77 展	自由で新しい表現を志向する作家集団とし、個展形式で発表した。現代美術の新鮮な風を求め絵画・版画・陶芸や立体表現等の作品を展示した。	52.10.4 ～10.13	171

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
千 葉 市 小 中 学 校 児 童 生 徒 作 品 総 合 展	図工、美術、技術、家庭、理科、書写、特殊 教育、学校園等の作品展を行うことにより、 教育的質の向上をはかった。	52.10.15 ～10.20	4.000
千 葉 県 大 学 美 術 連 盟 展	絵画、彫塑などの美術を媒体として親睦をは かりながら、研究活動の集大成を多くの方々 に批評していただき、活動のよりどころとした。	52.11.29 ～12.4	165
第 22 回 子 ども 県 展	次代をになう児童・生徒の情操教育に役立つ とともに創造性を高める。ために、多くの作 品を展示し、要望にこたえた。	52.12.6 ～12.18	4.454
第 三 文 明 展	洋画、日本画、彫刻、工芸、書の5部門の総 合美術展として、広く芸術性を世に開いた。	52.12.20 ～12.25	237
第 43 回 登 龍 社 ・ 宮 坂 会 書 初 展	小・中・高と各学年ごとに課題を決め、日本 古来の伝統ある書初を展示し文化の向上をは かった。	53.1.6 ～1.8	230
昭和52年度千葉大学教育 学部書道科卒業制作展	千葉大学教育学部書道科の卒業制作展今年度 の卒業生を主として、書道を専攻した成果を 発表した。	53.1.17 ～1.22	50
昭和52年度千葉大学教育 学部美術科卒業制作展	美術の各分野にわたって四年間の勉学の成果 を発表し、指導を受けることを目的として展 示したい。	53.1.24 ～1.29	35
第 30 回 千 葉 県 小・中・高校書初展	書初を通じて書道習字教育の振興をはかる目 的で、応募者約25万人の中より優秀作品を一 堂に集めたものである。	52.1.31 ～2.5	581
日 本 習 字 千 葉 県 書 道 展	幼児から成人にわたって、正しい文字、美し い文字の習字の習字教育の普及をはかる	53.2.8 ～2.12	2.347

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
子 供 造 形 展	千葉美術アカデミー造形教室展で幼児童の作品の発表の場とした。	53. 2. 21 ～2.26	548
第 3 回 千 葉 県 民 写 真 展	写真文化の向上をはかる目的で、全県下のアマチュアカメラマンを対象に公募もし、広く展覧した。	53. 2. 21 ～3.5	367
習 美 会 ・ 新 春 展	習志野市に在住、勤務する人達を中心とした美物作品展として、親しまれた展覧会としたい。	53. 2. 28 ～3. 5	248
第 9 回 千 葉 市 民 展	市民文化の向上を図るために、市民から公募した展覧会を企画した。	53. 3. 11 ～3.26	950
第 25 回 書 展 星 展 教 育 部 展	小・中・高校生を対象とした条幅作品の展示をし、制作意欲の向上を図る展覧会である。	53. 3. 28 ～4. 2	1,221

教育普及

美術普及室の開設

本館では広く県民に美の広場を提供してきたが、さらに美の生活化を目ざして直接触れ合いのできる場を4月10日に美術普及室として開設した。

館の正面入口から最も近い第六室を改造し、図書・展示・談話・集会・情報コーナーに区分し、常時館員が相談に応ずるようサービスに努めている。

美術の専門研究から展覧会等の催物まで、美術のことならなんでも自由に話し合いと習ができるよう心掛けています。

各コーナーの割役りは次のようになっている。

- 図書コーナー 世界の美術全集や辞書など美術の基本図書や雑誌・新聞等美術知識を学べる図書を備えて、自由に閲覧することができる。
- 展示コーナー 美術作品以外の参考資料を展示してある。
- 談話コーナー 利用者がお互いに自由に話し合い、また美術相談に応ずる場であり、ソファを置き見学者の休息もできる。
- 集会コーナー 友の会や団体見学者等に利用いただくため、机・腰掛を置き、オリエンテーションや小規模な会合に使える。
- 情報コーナー 壁面を利用して、各地の展覧会等の催物のポスターや、情報の収集・整理をして、質問に応じたり、美術団体等との連絡を密にする場となっている。

美術館の目標である「みる・かたる・つくる」を実現させるため、第三期工事で美術普及棟が完成するまでの期間とりあえず業務を開始した。

4月10日の初日からすでに1カ年がたとうとしというが、多くの方々が利用され、お母さんが美術全集を広げて、お子さんに教えている姿・催物の期日を手帳に書きこむ方・昼食時の休憩を利用して雑誌に目を通す事務服の娘さんなど、美術普及室の必要性を実感として捉えることができる。皆さんのご意見もとり入れながら、愛され喜ばれる室に育てていきたいと思う。



普及室内部



利用風景

講演会

「なぜ漁民を描くか」

講師 渡辺 学氏

期 日 昭和53年7月16日

渡辺さんの生い立ちと当時の銚子の様子を絡ませながら、多感な少年時代、そして中学校時代、美術学校時代と話されていく中に、絵に対する情熱をひしひしと感ずるのであった。

漁民を描くことは、思想というよりも自然の生活からごく自然に生まれたものであり、漁場の人々の野性的な逞しいエネルギーが郷土銚子の歴史を作っているならばこれを記録したいと思うところが原点となっている。芸術が特別な観念からつくられるものでなく

あらゆる分野に係わりある人間として、真実を基礎に創造され、それが作家の生きることに繋がっていくことを、又そのような生活姿勢しかないということをつくづくこの漁場の人々に教えられた。私のような画家もまた一個の人間として、真実を見きわめる作家が大切であること。そして、その真実を見きわめる作業が結局、絵を描くことでしかなく、漁場の人々を繰り返し描くのことにつながっていると述べている。

そして、自分自身の眼でとらえ漁場の記録を描こう、記録画として残そう、その記録はあくまでも自分がみて考えたものでしかないのだが、しかし少なくとも他の土地から来た人間よりは、真実にいくらかでも近いものが描けるのではないかと結ばれた。



美との巡りあい —残照から唐招提寺障壁画まで—

講師 東山 魁 夷氏

期 日 昭和53年3月18日

この講演会は、特別展—残照から唐招提寺障壁画まで—東山魁夷展の開催に伴う記念事業の一環として、千葉県美術会の後援により行われたもので、この日、市民会館には開館一時間前から熱心な方々の列が続き開館まもなくホールの客席は、千人の聴講者で満席となった。

この講演会聴講者は、2月20日までに申込まれた約2000人の中から抽選によって得た人々で、入場券を、中には、五か月も前より申込んだ人もあった。

氏は、絵画は無言の芸術であり、作品とそれを見る人との間に交わされる言葉でない会話であると前置きされ私の画業は「残照」から「唐招提寺障壁画」の間に凝縮されている。「残照」は画家として認められた作品であり「唐招提寺障壁画」は30年の画業の集大成である。美術学校卒業後の長い間の暗中模索の時期、母や兄弟をなくした生涯のどん底、悲しみを味わいつくし、将来の希望のもてない私は、21年の冬、鹿野山の九十九谷を眺めていると自我が消滅して、あるいは心が澄んで自然と自己とが生命を共有するもののように思えた。冬枯れの悲しい山々その寂寥が私の心にむしろ安らぎを与えてくれた。九十九谷の実景と昔歩いた甲州・信州の山々を二重写しにして生まれた作品が「残照」である。そして30年の間に、北欧風景画、京洛四季、白馬の見える風景等そして唐招提寺障壁画を描いてきた私の歩みを辿ってみると、「残照」が根底になっており「遍歴」と「回帰」「あこがれ」と「郷愁」のくりかえしのように思えると語られた。



講習会

「みる・かえる・つくる」の活動の一環として昨年度より始めたが、引続き本年も行った。

(1) 千葉を描く

期 日 昭和52年5月22日

講 師 千葉大学教授 海老沢巖氏

参加者数 40名

内 容 風景画の基本的な描き方から、対象の
とらえ方と表現力の向上をはかろうと
するものである。

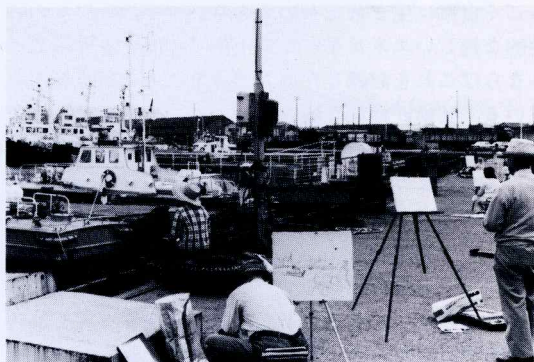
(2) 人物画の基礎から着彩まで

期 日 昭和52年7月23日～7月24日

講 師 千葉大学助教授 太田 洋三氏

参加者数 40名

内 容 人物画を始めるための心構えや、その
基本技法、水彩えのぐによる着彩の仕
方等、作画の実際にそくして、初心者
でも楽しく学べる人物画の入門講座で
ある。



千葉港を描く

(3) 木版画 下絵から摺りまで～

期 日 昭和53年1月18日～2月19日

講 師 版画家 星 襄 一氏

参加者数 40名

内 容 初心者向きの木版画入門講座として下
絵のつくり方から摺りまでの基本的技
法等、制作実習を通して楽しく学べる
実技講座である。

洋画実技講座

友の会との共催で行われたもので、美術館の“つくる”活動の一つとして制作の楽しみを味わいながら、年間を通じ初心者を含めて系統的な実技指導を行うものである。

講 師 千葉大学教授 武内 和夫氏

受講者数 40名（各回同一人）

日程及び講習内容

回	月 日	講 習 内 容
1	4. 10	石膏像によるデッサン
2	5. 20	〃
3	6. 5	モデルによるコスチュームデッサン
4	7. 3	〃
5	9. 4	裸婦油絵
6	9. 11	裸婦油絵
7	10. 2	風景写生 港周辺
8	11. 6	室内静物の写生
9	12. 4	モデルによるコスチューム油絵



美術を語る会

美術普及事業の一環として、美術一般に関する問題をテーマに語り合い』の中から、作家や作品をはじめ各国の美術館等についての知識や理解を深める談話会「美術を語る会」を定期的に開催し、“美の広場”の充実をはかることに意義づけている。

第1回 52年5月14日

話題提供者 本館副館長 高橋 在久

テーマ 浅井 忠

日本近代洋画界の先駆者「浅井忠」の幼年時代、工部美術学校時代、明治美術会時代、フランス留学時代、京都時代にみられる画業への情熱と作品をとおして、今日の美術界に残したその業績を知ることができた。

第2回 昭和52年7月9日

話題提供者 本館協議会委員 遠藤 健郎氏

テーマ 海と湖沼展をみて

特別展「海と湖沼展」の開催にともない、自然との対話の結晶を通し、海と湖沼に托された作家の情念や自然美の再発見と多様な心象表現について理解を深める。

第3回 昭和52、9月10日 52年

話題提供者 大妻女子大学講師 金子 量重氏

テーマ 現代工芸を語る

企画展房総の美術家シリーズ7「現代工芸六人展」の開催にともない、多様化する現代工芸の技法や作品等についての知識や理解を深める。

第4回 昭和52年11月12日

話題提供者 県立中央図書館副館長 平野 馨氏

本館副館長 高橋 在久

テーマ 世界の美術館・博物館見てある記

欧米諸国訪問の話題をもとに、国内はもちろん諸外国の美術館・博物館の特色や名作・名品などについて知識や理解を深める。

第5回 昭和53年1月14日

話題提供者 彫刻家 大須賀 力氏

菅谷元三郎の縁者 白井 三郎氏

テーマ 菅谷元三郎・円城寺昇を語る

企画展房総の美術家シリーズ7「菅谷元三郎・円城寺昇展」の開催にともない、この二人の画業や作品、房総の美術のとかかわりなどについての知識や理解を深める。

第6回 昭和53年3月11日

話題提供者 筑波大学教授 桑原 住雄氏

テーマ 東山魁夷の人と芸術

特別展～「残照」から唐招提寺障壁画まで～東山魁夷展の開催にともない、現代日本の芸術界を代表する日本画家東山魁夷の画業や作品について理解を深める。



第1回美術館夏季大学—美術入門講座—

“みる・かたる・つくる” 美の広場をめざす、千葉県立美術館では、美術普及活動の一環として、「美術を見る眼」を養うため、日本の美術の歴史的な推移や多様化した現代美術などの理解を深める学習講座「美術館夏季大学」を開設する。

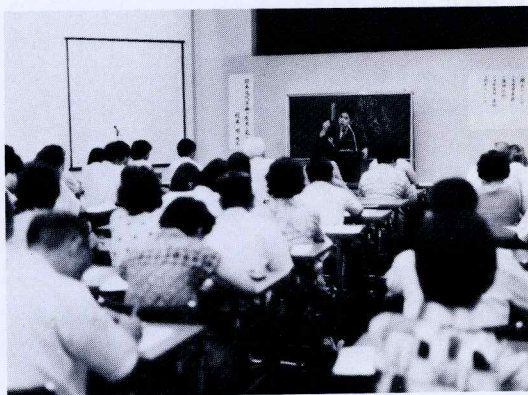
今回は、日本近代絵画、彫刻の流れとその時代に代表される作品の見かたや、さまざまな表現様式をもって展開される現代美術の動向の理解を課題に開講する。

日 時 昭和52年8月5日～8月6日

参加者数 120名

内 容

	講 師	課 題
8月5日	村木 明 (武蔵野美術大学教授)	・近代絵画の歴史と見かた
	佐々木 直比古 (山種美術館学芸部長)	・近代日本画の歴史と見かた
8月6日	弦田 平八郎 (神奈川県立美術館学芸課長)	・日本近代彫刻の歴史と見かた
	桑原 住雄 (筑波大学教授)	・現代美術の動向と見かた



見 学 会

友の会と共催で行われ、文化財や美術品をたずねながら同好の親睦を深めるものである。

(1) 上総の美術・文化財を訪ねる

期 日 昭和52年5月8日

参加者数 100名

初夏まことにさわやかな日、神野寺、九十九谷、県立上総博物館、金鈴塚遺跡保存館を訪ねた。

(2) 水戸・笠間に歴史と美術を訪ねる

期 日 昭和52年10月29日～10月30日(1泊2日)

参加者数 50名

晴天に恵まれた二日、水戸市の偕楽園、茨城県立歴史館、茨城県立美術博物館、日動笠間美術館、笠間稲荷を訪ねるとともに、笠間焼きの絵づけもした。



「みる・かたる・つくる」

千葉県立美術館報の発行

VOL. 4 No 1 (52. 5. 10発行 8 頁)

目次・観潮台

- ・私の公立美術館論(I)
- ・美術普及室の開設
- ・《美の根》
- ・展覧会案内
- ・新収蔵作品紹介
- ・お知らせ
- ・日誌抄

VOL. 4 No 3 (52. 11. 10発行 8 頁)

目次・観潮台

- ・浅井忠の原風景
- ・房総の美術家シリーズ7
「菅谷元三郎・円城寺昇展」をまえに
- ・「海と湖沼展」アンケートより
- ・入館者30万人突破
- ・《美の根》
- ・本館企画の展覧会案内
- ・新収蔵作品紹介
- ・トピックス
- ・伝言板
- ・談話コーナー
- ・関博協研究会本館にて盛大に開催
- ・お知らせ
- ・日誌抄

VOL. 4 No 2 (52. 8. 10発行 8 頁)

目次・観潮台

- ・私の公立美術館論(II)
- ・本館初の巡回展
～千葉県移動美術館～
- ・すすむ普及事業
- ・特別展「海と湖沼展」をかえりみて
- ・《美の根》
- ・展覧会案内
- ・新収蔵作品紹介
- ・トピックス
- ・お知らせ

VOL. 4 No 4 (53. 2. 10発行 8 頁)

目次・観潮台

- ・東山魁夷展を迎えて
- ・旅と作品～「晩照」を中心として～
- ・東山魁夷展の全貌
- ・本館企画の展覧会案内
- ・新年度の各種講座あない
- ・トピックス
- ・伝言板
- ・談話コーナー
- ・ヨーロッパの印象
- ・お知らせ
- ・日誌抄



友の会(葉美会)

(1) 運営方針

- ① “みる・かえる・つくる” 美術館活動に積極的参加の促進
- ② 会員加入の促進 (目標 1,000名)
- ③ 美術館普及棟の建設促進

(2) 組 織

人数 会員数 838名

名称 千葉県立美術館友の会役員

●千葉県立美術館友の会役員

職 名	氏 名	分 担
名誉会員	松 戸 節 三	
会 長	鈴 木 民 三	
副 会 長	市 原 正 夫	
〃	永 田 澄 子	事 業
〃	江 尻 幹 雄	親 睦
事務局長	大 里 功	総 務
監 事	始 関 妙	広 報
〃	三 宅 寿美子	親 睦
理 事	安 田 博 亮	総 務
〃	新 城 瑠璃子	〃
〃	田 中 環	事 業
〃	押 尾 禎 一	広 報
〃	平野野 元三郎	親 睦
〃	村 上 十 吉	事 業
〃	大 藤 敬 美	親 睦
評 議 員	新 城 瑠璃子	
〃	大 高 鐘 蔵	
〃	木 内 俊 雄	
〃	安 達 園 子	
〃	仲 田 茂 房	
〃	永 田 澄 子	
〃	三 宅 寿美子	
〃	押 尾 禎 一	
〃	大 藤 敬 美	

職 名	氏 名
評 議 員	高 橋 喜一郎
〃	藍 野 正 和
〃	酒 井 千代子
〃	日 暮 幸 子
〃	松 本 康 雄
〃	西 田 葆
〃	大 塚 輝 子
〃	下 田 祐 子
〃	加 藤 信 子
〃	長谷川 芳 衛
〃	近 藤 愛 子
〃	目 下 めぐみ
〃	香 川 美智子
〃	湯 浅 幸 一
〃	梶 村 真 子
〃	林 美貴枝
〃	中 村 綾 子
〃	小 室 守 一
〃	戸 部 艶 子

(3) 事 業

- ① 友の会報 (しおさい) の発行および、講演会、講習会、美術を語る会、見学会を本館と共催で行った。

② 第2回美術館友の会作品展

会 期 昭和52年11月29日～12月11日

展示点数 173点

実技講座での作品や家事や勤務の合間に制作した苦心の力作を持ちより、“つくる”活動から“みる”・“かたる”活動を通して、美術愛好者の親睦を深め、楽しさを分か合う機会とする。

友の会だより 「しおさい」の発行

No.8 (52.6.10 発行 6頁)

目次・基礎からしっかりと

～洋画実技講座始まる～

- ・五月晴れの上総路に行く
～第4回友の会バス旅行～
- ・ミニミニ・ニュース
- ・遠足のコースに県立美術館をご活用ください
- ・県民と美術館を結ぶパイプ役に
～会長あいさつ～
- ・展覧会あんない
- ・お知らせ

No.9 (52.8.10 発行 6頁)

目次・「海と湖沼展」を見て

- ・酷暑ものから、美を追求
- ・ミニミニ・ニュース
- ・会員だより
- ・街で美をひろう(1)
- ・展覧会あんない
- ・お知らせ

No.10 (52.11.22 発行 6頁)

目次・芸術の秋「県展」ひらく

・常陸に秋と美をさぐる

～第5回友の会バス旅行～

- ・ミニミニ・ニュース
- ・会員だより
- ・街で美をひろう(2)
- ・洋画実技講座だより
- ・展覧会あんない
- ・お知らせ

No.11 (53.2.22 発行 6頁)

目次・創作の喜び「友の会作品展」

- ・優雅にして詩情豊かな東山芸術
- ・ミニミニ・ニュース
- ・会員だより
- ・展覧会あんない
- ・お知らせ



昭和52年度事業一覧

月	本館企画の展覧会	普及事業	団体展
4	10 常設 房総の美術家 —近代美術の10人—	・ 洋画実技講座 (4/10)	第4回全日本書の友会展 (4/12~4/27)
5		・ 見学会 (5/8)	第4回千葉工芸会展 (4/26~5/6) 歩会第3回展 (4/26~5/8) 千葉新協美術展 (5/3~5/8) 二科千葉支部展 (5/10~5/15) 水彩連盟千葉支部展 (5/10~5/15) 墨の県展 (5/17~5/29)
6		・ 洋画実技講座 (6/5)	第24回千葉県書道協会展 (5/31~6/5) 独立千葉在住者展 (6/14~6/26)
7	26 1 特 別 展 海と湖沼展	・ 洋画実技講座 (7/3) ・ 美術を語る会 (7/9) ・ 講演会 (7/16) ・ 講習会 (7/23~7/24)	第5回千葉県書壇秀拔展 (6/28~7/3) 第1回千葉美術シンポジウム展& 青枢展 (7/12~7/24) 第3回児童合同美術展 (8/2~8/7) 第2回子供と教師の作品展 (8/16~8/21)
8	26 31 5 世界の子どもの絵展	・ 夏季大学 (8/5~8/6) 美術入門講座	「明るく楽しい家庭づくり」ポスター・標語展 (8/16~8/21) いてふ会彫刻展 (8/23~8/28) 千葉市教職員美術展 (8/23~9/4) 書道芸術院南関東展 (9/6~9/11) 問われる表現展 (9/13~9/18) 第6回写真千葉県展 (9/13~9/18) 千葉新象展 (9/20~9/25) 文化書道千葉県連合会展 (9/20~9/25)
9	28 10 常設 房総の美術家 —新収蔵作品展— 房総の美術家シリーズ6 現代工芸六人展	・ 洋画実技講座 (9/4) ・ 美術を語る会 (9/10) ・ 洋画実技講座 (9/11)	モダンアート協会千葉県在住作家展 (9/20~10/2) 第24回千葉県勤労者美術展 (9/27~10/2) 第9回ファンシー洋画展 (9/27~10/2) 千葉市水墨画同好会連合会展 (9/27~10/2)

月	本館企画の展覧会	普及事業	団体展
10	房総の美術家シリーズ6 現代工芸六人展 常設 房総の美術家 —新収蔵作品展—	・洋画実技講座（10/2） ・見学会（水戸・笠間方面） （10/29～10/30） ・洋画実技講座（11/6） ・美術を語る会（11/12）	第7回新構造千葉県支部美術展 （10/4～10/10） 千葉77展（10/4～10/13） 千葉市小中学校児童生徒作品総合展 （10/15～10/20） 第29回 回 県 展 （11/2～11/13） 第9回千葉県高等学校芸術祭 美術・工芸・書道展（11/19～11/27） 昭和52年度千葉県芸術祭 写真展 （11/19～11/27） 千葉県大学美術連盟展 （11/29～12/4）
11	千葉県移動美術館 （於県立上総博物館）		美術館友の会作品展 （11/29～12/11） 第22回こども県展（12/6～12/18）
12	常設 房総の美術家 —収蔵作家20人展— 千葉県移動美術館 （於県立安房博物館）	・洋画実技講座（12/4） ・美術を語る会（1/14）	第3文明展（12/20～12/25） 第13回登龍社・宮坂会書初展 （1/6～1/8） 昭和52年度千葉大学教育学部書道科 卒業制作展（1/17～1/22） 昭和52年度千葉大学教育学部美術科 卒業制作展（1/24～1/29） 第30回千葉県小中高校書初展 （1/31～2/5） 日本習字千葉県書道展 （2/8～2/12）
1	房総の美術家シリーズ7 菅谷元三郎・円城寺昇二 人展 常設 房総の美術家 —収蔵作家20人展—	・美術を語る会（1/14）	子供造形展（2/21～2/26） 第3回千葉県民写真展 （2/21～3/5） 習美会新春展（2/28～3/5）
2	文化庁提供 第11回現代美術選抜展	・講習会（2/18～2/19）	
3	特別展 —残照から唐招提寺障壁画 東山魁夷展 まで—	・美術を語る会（3/11） ・講演会（3/18）	第9回千葉市民美術展 （3/11～3/26） 書星展教育部展（3/28～4/2）

利用状況

開館以来、入館者総数を調査してきたが、4年目を迎え今後の運営ならびに普及方針を検討するために、9月より地域別、種別入館者 査を行った。その結果は、下記の通りである。

昭和53年3月31日現在
(52.41～53.3.31)

昭和52年度入館者一覧表

種別 月別	開館 日数	個 人			団 体						人 数 合 計	備 考
		一般成人 人 数	大・高生 人 数	中・小生 人 数	一般成人		大・高生		中・小生			
					人 数	団数	人 数	団数	人 数	団数		
4	21	4.757	396	1.324	89	3	82	2	83	2	6.731	
5	26	7.877	798	2.040	208	6	0	0	307	4	11.230	
6	26	3.588	330	863	235	7	47	1	247	3	5.310	
7	27	5.544	501	1.586	93	2	55	1	51	2	7.830	特別展「海と湖沼展」
8	26	5.625	576	1.650	213	3	0	0	45	2	8.109	
9	26	5.892	645	1.601	173	5	0	0	190	1	8.501	
10	18	6.824	222	4.977	359	9	279	1	694	11	13.355	
11	21	12.235	1.310	3.006	436	11	575	6	155	4	17.717	県 展
12	22	7.008	320	3.643	410	13	98	2	200	6	11.679	
53年 1	24	2.703	503	800	167	6	0	0	21	1	4.194	
2	16	4.396	245	2.209	92	3	28	1	0	0	6.970	
3	27	40.786	3.714	5.326	510	13	36	1	753	10	51.125	特別展「東山魁夷展」
計	280	107.235	9.560	29.025	2.985	81	1.200	15	2.746	46	152.751	
累計	946	396.696										

地域別入館者状況

種別 月別	開館日数 (日)	県 内		県 外		そ の 他	
		千葉市(人)	その他の県内(人)	東京都(人)	その他の県外	外 国 (人)	不 明 (人)
9	26	4.747	2.915	232	119	6	482
10	18	11.273	1.802	108	41	0	131
11	21	9.944	6.757	361	152	0	503
12	22	5.272	5.709	135	44	0	519
1	24	2.427	1.336	169	73	33	156
2	16	3.916	2.745	98	77	2	132
3	27	5.384	4.855	558	438	6	39.884
計	154	42.963	26.119	1.661	944	47	41.807
		41.854					
割合(%)		37.8	23.0	1.5	0.8	36.9	

日 誌 抄

- 4月10日 常設「房総の美術家」始まる。美術普及室が開設される。
- 21 友の会総会
- 5月8日 友の会主催見学会（上総方面）
- 14 「美術を語る会」開催
- 19 千葉県博物館協会総会
- 20 美術館協議会開催
- 22 第1回実技講座「千葉港を描く会」開催
- 26 山梨県美術館準備室より
- 6月10日 東京電力株式会社より庭園樹木寄贈される
- 23 神奈川県立博物館より美術普及室を視察に来館
- 7月1日 特別展「海と湖沼展」始まる
- 9 美術を語る会開催
- 16 講演会「なぜ漁民を描くか」渡辺学氏。
- 18 30日まで博物館実習を行なう。実習生5名
- 20 埼玉県立博物館来館
- 21 美術資料評価委員会開催
- 23 第2回実技講座開催
- 31 安嶋文化庁長官特別展視察
- 8月5日 常設展第2期はじまる第1回夏季大学開催
- 31 第2回県博協役員会開催
- 9月10日 現代工芸六人展はじまる 美術を語る会開催
- 16 山梨県財政課来館
- 20 51年度年報刊行する
- 27 鹿児島市立美術館来館
- 30 東京国立文化財研究所松原庶務課長黒田清輝展打合せのため来館
- 10月11日 第1回美術館協議会開催
- 13 関東地区博物館協会研究会開催
木村賢太郎「立像」玄関前に設置される
- 22 県展作品搬入はじまる
- 29 友の会主催見学会（水戸笠間方面）
- 11月1日 ライオンズクラブよりクリーンボックス、5個寄贈される
- 2 第29回県展はじまる
- 3 千葉県移動美術館開く（於県立上総博物館）
- 5 千葉県緑化推進委員会より樹木が寄贈される
- 6 洋画実技講座開く
- 12 美術を語る会開催
- 21 県文教常任委員、本館を視察
- 12月4日 千葉県移動美術館開く（於県立安房博物館）
- 12月18日 山梨県立美術館建設準備室より来館
- 20 菅谷元三郎・円城寺昇展開く
- 1月14日 美術を語る会開催
- 20 千葉南ロータリークラブより樹木寄贈される
- 29 第11回現代美術選抜展開く
- 2月3日 和歌山県立近代美術館来館
- 13 富山県教育委員会来館
- 15 長岡市美術会来館
- 17 奈良県立美術館・熊本県立美術館来館
美術館協議会「現代美術選抜展」終了
- 19 版画実技講座開く 工事のため臨時休館（2月26日まで）
- 21 富山県教育委員会来館
美術普及棟設置研究会
- 23 茨城県立歴史館・岩手県教育委員会来館
- 28 浅井忠像建設世話人会
- 3月3日 「東山魁夷展」レセプション
- 4 特別展「東山魁夷展」開く 映画会を開く
- 7 横山大観記念館・来館 県博協学芸職員研修会
- 9 東京国立文化財研究所来館
- 10 初めて夜間公開を行う
- 11 鳥取県立博物館長来館
美術を語る会開催
- 15 浅井忠像建設世話人会
- 18 千葉市民会館にて東山展記念講演会を開く
- 21 東山魁夷氏と西ドイツ在日観光協会事務所長御夫妻来館
- 23 弘前市立博物館・東京都美術館長来館
- 27 宮城県東京事務所長来館

関係令規

1. 博物館管理規則

昭和45年12月25日教育委員会規則第22号

目 的

第1条 この規則は、教育機関設置条例（昭和32年千葉県条例第4号）第20条に規定する博物館（以下「館」という。）の管理に関し必要な事項を定めるものとする。

（開館時間）

第2条 館の開館時間は、午前9時から午後4時30分までとする。

2. 館の長（以下「館長」という。）は、必要があると認めるときは、前項の規定にかかわらず、開館時間を変更することができる。

（休館日）

第3条 館の休館日は、次のとおりとする。

一 定期休館日 月曜日（その日が国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）第2条に規定する日に当たるときは、その翌日）

二 国民の祝日に関する法律に規定する日

三 年始休館日 1月1日から1月4日まで

四 年末休館日 12月26日から12月31日まで

五 臨時休館日 特別の事情により、館長が休館を必要と認めた日

2. 前項の休館日であっても、館長が特に必要と認めた場合は、館の全部又は一部を開館することができる。

（入館の制限）

第4条 館長は、次の各号の一に該当する者に対して入館を禁じ、又は退館を命ずることができる。

一 特別展覧会を観覧しようとする者で、所定の観覧券を所持しないもの

二 適当な指導者、保護者又は付添人のない6歳に満たない者

三 でい酔者、伝染病患者その他観覧者に不快の感を与えると認められる者

（観覧券等）

第5条 館の特別展覧会観覧券は、別記第1号様式とする。

2. 団体（20人以上の場合をいう。）で観覧しようとするときは、あらかじめ団体観覧申込書（別記第2号様式）により、館長に申し込まなければならない。

（禁止行為）

第6条 入館者は、次に掲げる行為をしてはならない。

一 展示品に手をふれること及び展示室でインク、墨汁類を使用すること。

二 許可なくして展示品を模写し、又は撮影すること。

三 所定の場所以外の場所において喫煙又は飲食すること。

四 その他他の入館者の妨げになるような行為すること。

（損害の賠償）

第7条 館長は、入館者が館の展示品、建物若しくは備品等をき損し、又は汚損したときは、現品又は相当の代価をもって弁償させることができる。

（委 任）

第8条 この規則の施行に関し必要な事項は、教育長の承認を得て、館長が定める。

附 則

この規則は、昭和46年1月15日から施行する。

別記様式（省略）

2. 使用料及び手数料条例（抜粋）

昭和31年3月31日条例第6号

（趣 旨）

第1条 県が徴収する使用料及び手数料（以下「使用料等」という。）に関しては、別に規定するもののほか、この条例の定めるところによる。

（使用料等の徴収）

第2条 県が所有し、又は管理する行政財産及び公の施設（以下「財産等」という。）の使用並びに特定の個人のためにする事務（以下「事務」という。）に関し、法令及び他の条例に規定するもののほか、当該事務を依頼しようとする者から手数料を徴収するものとする。

（種類及び額）

第3条 前条の規定により使用料等を徴収する財産等及び事務の種類並びにその使用料等の額は別表第一に掲げるとおりとする。

（中 略）

別表第一（第3条第1項抜粋）

財産又は事務の種類	手数料	区 分	単 位	額
博 物 館	入場料	特別展覧会	1人1回につき	300円以内

（以下略）

3. 展示室使用料

昭和50年4月1日千葉県教育委員会指示第71号

- 千葉県立美術館展示室の使用料については、使用及び手数料条例第5条第3項に基づき減免することとし、当分の間次表のとりの額とする。

室 名	面 積	使 用 料 午前9時から午後5時まで	
		観覧料無料、 展示物販売を しない場合	観覧料有料又 は展示物販売 をする場合
第一展示室	438㎡	4,000円	左の倍額
第二展示室	400	4,000	〃
第三展示室	469	4,500	〃
第四展示室	403	4,000	〃
第五展示室	824	8,000	〃
第六展示室	330	3,000	〃
第七展示室	567	5,500	〃
全 室	3,431	33,000	〃

ただし、県及び県教育委員会が共催ないし後援する場合並びに国又は他の地方公共団体の主催ないし共催する行事に係る使用の場合は無料とし、その他県教育委員会教育長が特に教育的文化的意義を認める行事に係る使用の場合は上記の半額とする。

- 千葉県立美術館展示室の使用の許可に関する取扱いは、別紙「千葉県立美術館展示室の使用許可に関する取扱要綱」によるものとする。

●千葉県立美術館友の会会則

(名 称)

第1条 本会は、千葉県立美術館友の会という。(略称、葉美会)
(事務所)

第2条 本会は、事務局を千葉県立美術館内におく。

(目 的)

第3条 本会は、千葉県立美術館（以下「館」という。）の活動に協力し、楽しいふんい気のなかで、教養を豊かにし、美術文化の向上をはかり会員相互の親睦を深めることを目的とする。

(事 業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため次の事業をおこなう。

- 館の展覧会の見学鑑賞
- 講演会、講習会、研究会等
- 館外見学会
- 機関紙等の編集刊行

- その他目的達成に必要な事業

(会 員)

第5条 本会は、会の目的に賛同するものをもって組織する。

- 会員には次の特典がある。

- ①館の主催又は共催による展覧会観覧の優待
- ②美術館報「みる・かたる・つくる」ならびに友の会機関紙の配布
- ③本会発行の図録等の配布及び割引購入
- ④本会事業への参加

2. 本会活動に協力し、賛助会費を納めたものは賛助会員とする。

(会員の加入・退会)
第6条 本会に加入する場合は申込書に入会金(500円)を添えて事務局に提出し、会員証の交付を受ける。退会の際は退会届を提出する。

(役 員)

第7条 本会に次の役員をおく。

会長1名 副会長3名(ただし内1名は美術館長があたる)

理事 若干名 事務局長1名 監事2名 評議員 若干名

1. 会長・副会長・理事・事務局長・監事の選出は評議員会において推挙する。

2. 役員の任期は2年とする。ただし再任は妨げない。

(役員等の任務)

第8条 本会の役員の任務は次のとおりとする。

1. 会長は本会を代表して会務を総理し、会議を召集し、その議長となる。
2. 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代理する。
3. 理事は会の運営にあたる。
4. 事務局長は会務を処理する。
5. 監事は本会会計の監査をする。

(顧問・名誉会員)

第9条 この会に顧問及び名誉会員をおくことができる。顧問及び名誉会員は評議員会で推挙する。

(支 部)

第10条 地域、並びに職域ごとに20名以上の会員を有する場合は支部をおく。

(評議員会)

第11条 各支部より20名につき1名の割で推せんされた代表と賛助会員及び講座代表をもって評議員会を構成する。評議員会は毎年1回以上開き、事業計画、予算、決算、役員の決定その他の重要方針を決議する。

(会 費)

第12条 本会の普通会員は毎年度当初に年額 1,200円の会費を納入する。

1. 5月以降の入会者については1ヵ月ごとに 100円を減減するものとする。ただし減減金額は、600円を限度とする。

(経 費)

第13条 本会の経費は会費、寄附金、事業収益金、その他の収入をもってあてる。

(会計年度)

第14条 本会の会計年度は毎年4月1日にはじまり、翌年3月31日におわる。

(職 員)

第15条 本会の事務局職員は館に勤務する者以外から、会長が委嘱する。

(付 則)

1. 本会の会則は評議員会で出席者の過半数の同意を得なければ変更することができない。

2. 本会則は昭和50年6月28日より施行する。

●昭和51年5月29日一部改正 ●昭和52年4月21日一部改正

利 用 案 内

開館時間 午前9時より午後4時30分まで
 休 館 日 ・ 月曜日（ただし、月曜が祝日のときは開館）
 ・ 年末年始（12月26日～1月4日）
 ・ 展示替等のため、必要があるとき。
 入 場 料 ・ 無料（ただし、特別展は有料）
 団体観覧 ・ 団体に来館されるとき、あらかじめご連絡あれば作品等の解説をします。

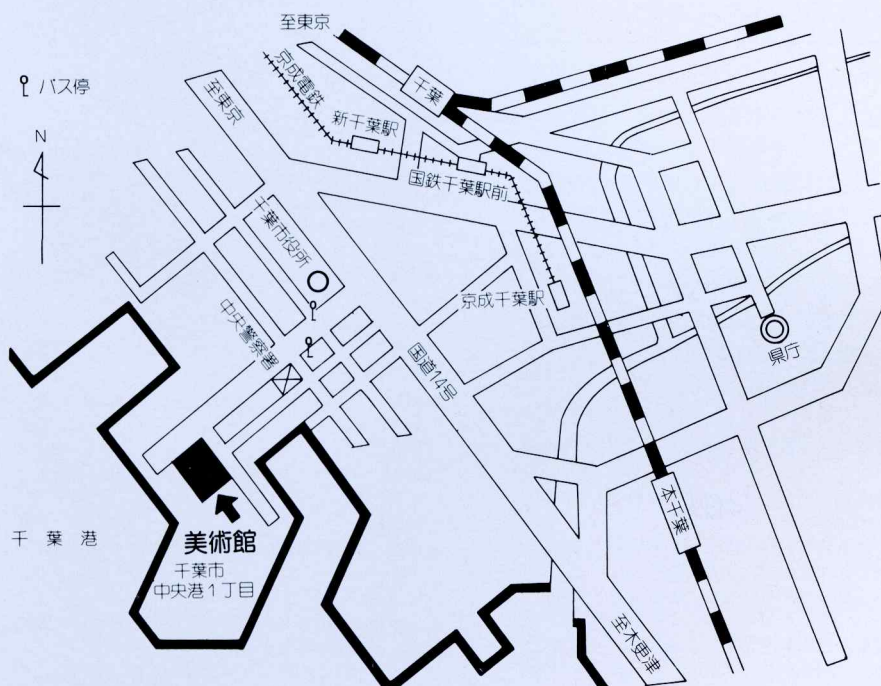
交 通 案 内

国鉄千葉駅前バス停③④番より「千葉市役所行」小湊京成、中央各バスで終点下車、徒歩約10分・⑦番「新港行」小湊、京成バスで中央署前下車、徒歩約6分

※日曜・祝日に限り下記のとおりバスが運行されています。

千葉駅発ぞごうデパート前	美術館発・玄関北側
9:40	9:55
10:10	10:25
10:40	11:00
11:15	12:25
12:40	12:55
13:10	13:25
13:40	14:20
14:35	14:50
15:05	15:30
16:45	16:00

案 内 図



みる・かたる・つくる
 千葉県立美術館年報(昭和52年度)
 発行 千葉県立美術館
 〒280 千葉市中央港1-10-1
 TEL 0472 (42) 8311
 印刷 (株) 博 秀 社

